

KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
LICENSED PRODUCT

Blue 1 2 3 4 5 6
Cyan 1 2 3 4 5 6
Green 1 2 3 4 5 6
Yellow 1 2 3 4 5 6
Red 1 2 3 4 5 6
Magenta 1 2 3 4 5 6
White 1 2 3 4 5 6
3/Color 1 2 3
Black 1 2 3

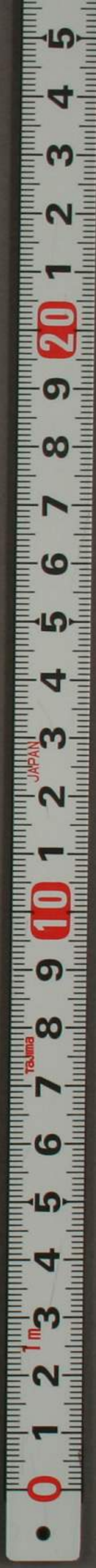
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



半閑窓談

全

僧
600
96



門 4
 冊 600
 卷 96



明の鷹岩山樵、水滸後、竹、免、初、の、れ、る、の、書、あ、る、を、志、す、に
 享和二年の夏の工、本、浪、連、と、遊、歴、せ、り、日、尾、北、名、護、包、の
 旅、亭、あ、く、あ、る、人、の、飛、奔、を、ま、を、ま、し、て、形、を、一、た、た、い、と、あ、つ
 り、く、思、ひ、し、る、回、月、を、あ、り、抄、録、し、て、ま、く、遠、志、を、傳、へ、り、か、て
 浪、連、と、赴、ち、て、あ、る、日、馬、田、先、人、と、醫生名、昌調、の、か、つ、り、
 言、の、つ、い、て、ま、の、書、の、ま、ま、及、び、工、馬、田、先、人、の、い、ひ、を、や、り、水、滸、後
 竹、と、二、本、あ、り、ま、の、中、に、天、花、翁、の、傳、し、や、つ、り、故、々、と、あ、り、し、時、二
 を、形、し、る、足、跡、を、ま、く、誇、り、し、る、と、ま、る、あ、る、あ、る、書、肆、を、あ、り、形、く
 あ、る、と、ま、の、書、名、も、知、し、る、に、稀、き、く、あ、り、し、ひ、足、を、ま、し、る、あ、り
 り、を、是、より、二十、餘、年、を、経、て、文、政、十、年、の、在、り、あ、り、先、哲
 友、伊、勢、初、也、形、の、内、の、原、也、殿、村、氏、浪、連、と、い、ひ、何、し、る、形、
号、藤、舟、

いづつ。天花翁のあし後傳は、以て形よりつりて之
とす。其一人と云ふゆかよも、そを養育する人のありとも
笑ふゆゑ存するも、その一人と云ふゆかよも、そを養育する
禪史の他あり、あまもさるは佳佳あり、あまもさるは佳佳あり
後傳の、かゝるも、今あるや形、や同よく行を、あまも
あまもさるゆゑ

天保二年辛卯の夏四月七日、若作堂より燈下識

(Faint bleed-through text from the reverse side)

水滸後傳批評半閑窻談

水滸後傳八卷 重訂本ハ屋久 回目早回、每卷署して古宋

遺民著、鴈宕山樵評とあり、明の萬曆戊申の秋 戊申ハ三十八年シ

下キ、鴈宕山樵が自序、並て古宋遺民の偽序、共二編あり、然

るを清の蔡昇が再評翻刻の新本と、件の二序を削去りて

自己の序をのこし載せ、その序、原本閑窻の歲月竟と混

減して、世と傳ふに、あまもさるは佳佳あり、あまもさるは佳佳あり

重訂本より、件の鴈宕山樵が自評と、贅題評を削去りて、その

卷毎に銘署して、古宋遺民、鴈宕山樵編輯、金陵慙客野

雲主人評定とあり、蔡昇字元放、辨野雲堂、古宋遺民、偽稱するもの、

鴈宕山樵が、自伝するを疑ひ、その序、削去りて、その序、

むろを暹羅の國王して。自餘の三十一人を臣下しあり。快らぬ作事
し彼國王よりふたぬ。柴進をいそぬまりかぬ。その人オ略るれども。周の天
子の後裔を。當時支族と稱せらる。只そのこのくねくね客を愛して
財を惜まぬ。林冲武松宋江も。多くみなるの落しきて。危難を免れし
る。いも多し。郵書の内こしひかすれり。李俊がことの論辨。素より也
思意と暗合も。惟その氏族の事卑しうして云云といふが。則
皇國ころふく。異邦のうして干く。柴進。暹羅をして宰相
なり。後世の作者も亦。その用心をたす。その身を思意と任
まら。暹羅の王する。たぬ本世三人あり。第一。宋安平也
う。その也。宋清が子。宋江の姪。吾の世をたはとあり。たぬ必
りたぬとあり。宋江生涯取がれ。嗣のきくも勿論。弟宋清。西個の

兒子也。家子を宋安平といひ。その次を某てとす。宋江世ありし時。父宋太公の
願ひより。宋安平を養嗣とす。宋江の本意あり。たぬ。父の情願辞
も。且後世を不孝とけり。経文も。遂にその意を任せり。と
り。趣と。好して。宋安平が人あり。文氏西あり。オけて。其。異邦の君
なる也。徳も。あつ。彼奸臣。宋鶴。半世の忠義。画餅なり。し
宋江が爲。寛を伸。是。一大。段。して。省官。拾掌。喚呼。と。和漢一致の
快変る。人を。後世の作者。身を思ひ。刺宋安平を文弱。字用の。人。と。志
より。い。わ。れ。た。し。と。あ。れ。蔡。晃。が。評。宋。安。平。を。字。用。の。前。世。の。宋。清。の
文弱の諸生あり。可も。亦不可。と。し。た。作者の用心。宋江を。オ
あり。徳あり。百八人の頭領。れ。益。を。虧。て。宋。清。を。か。み。と。作。り。が。
を。む。ら。む。の。軍。だ。後。世。の。宋。清。の。子。なり。と。オ。子。俊。傑。あり。や。

譬々鐵斗子樂和のどれその性伶俐しといふも前傳ルにける能る。
ウを後傳と手して。智畧吳用と伯仲をその美を以稚と云。宋
清も亦後傳に。一廉の役を着る。その子宋安平を右のどく。暹
羅の王に事をもとも。前傳と觀語をたふすべし。ゆゑに云てと云。かく
きるる。さういふに。後傳の他をいふ。只李俊子の厚くして。
宋江兄弟と薄くし。宿世あつた趣向し。知らぬ僻言も。評三
又その次。暹羅國の王をよび。花達春をよび。他。小李廣花榮の
子。花榮。弓箭の達人。原是宋の知寨。己王を以を梁山泊。落
草。そのもの。みづ。旅客を趕。脅して。物をとり。方。も。笑。え。ば。初
狀。と。く。愛。敬。あ。り。て。看。官。と。嬉。が。ら。う。子。花。達。春。も。亦。家。業。を。美
嗣。だ。て。射。藝。と。妙。あ。り。暹。羅。の。公。主。と。着。恋。せ。り。て。さ。や。く。駙。馬。と。し。

又前傳
宋江毒殺せり
此後花榮は
吳用と俱三六
墓上三吊哭
して終に續れ
死にた。宋江は
よく身元。あ
り。誰。に。い。ふ。
及。つ。た。か。れ。
その子花達春
を暹羅國の
王とせ。前傳の
果報を。い。ふ。
吳用も。怪。何
が。と。い。ふ。
あり。て。他。を。あ
り。し。を。い。ふ。
後傳。殘。餘。の。事
漢。と。云。は。家。

李俊は。か。し。を。媒。鳥。と。云。竟。大。業。を。あ。り。し。の。時。李。俊。が。よ。く
讓。り。て。花。達。春。を。王。と。せ。暹。羅。王。の。血。統。と。も。い。ふ。の。は。宋。江。の。本
意。不。稱。す。と。い。ふ。李。俊。は。大。義。士。と。云。み。づ。王。と。あ。り。勝。り。勿。論
暹。羅。の。物。と。い。ふ。の。王。馬。實。真。の。為。と。云。李。俊。等。三。十。餘。人。の。為。と。云。
設。け。し。と。い。ふ。馬。實。真。は。後。漢。の。名。將。馬。援。が。後。裔。と。い。ふ。の。は。
その。皆。花。達。春。の。王。位。を。嗣。して。李。俊。等。良。佐。と。い。ふ。と。云。不。り。た。と。
を。い。ふ。後。傳。の。作者。の。美。を。い。ふ。李。俊。を。よ。く。王。と。い。ふ。世。と。墓。上。を
旨。と。い。ふ。漢。と。云。の。致。を。所。と。い。ふ。又。や。を。魂。と。稱。す。と。い。ふ。評。四
既。上。と。い。ふ。宋。安。平。も。花。達。春。の。子。暹。羅。王。と。い。ふ。嫌。ひ。あ。り。と。
浪。子。燕。青。と。い。ふ。燕。青。は。盧。俊。義。の。家。僕。と。い。ふ。出。処。賤。し
かり。と。い。ふ。忠。義。拔。羣。し。且。その。智。惠。の。廣。大。と。い。ふ。吳。用。が。如。奸。計。を

あつてはさう
かたじけなく

呉用が林冲を囑賂をよみて、王偏を
殺せしむるを、甚下奸計なり。前傳に「李獅を使りて、徽宗帝に
咫尺して、招安の御書を賜り、遂に呼保義宋江に宿願を果せしむる
功も拔羣し。又後傳に「全堂に赴きて、徽宗帝に朝見して、柑子
青子をそまつり、御筆の便面を賜りし。人の及ばず取きて、さすに誠
忠尤けり。又只このころ、十金を調達して、囹圄の内を盧安人
母を贖ひ、泣く泣く件々事といひて、忠義と本つづるなり。幸二名残
餘の好漢、孰も燕青と及ぶべからず。後傳に「燕青をもて暹羅國の
王とするも、けしきあり、かくて人の意表に去り、作らぬくもあべり。後
傳の他をさしむるの意味、心づかぬあふもや。暹羅國の位階の級、燕青
第三位、第一階公孫勝、第二階宰相、柴進、第三階太子少師、燕青、亦有、李俊、尔勝、さすを、知、さす
李俊、機をえて禍を避くまゝのちあり。景山伯とありしと、水軍二の頭

領るに、遂に異國推遷、抱大將より亭。暹羅國に赴けり。象兄弟、先とせ
る先入の功をもち、夷狄の王に取らるし。評五

蔡昊が總評の第四に云、本傳雖是承接前傳而作、然然然
有勝似前傳處、如前傳所寫殺人、固有其罪者、
亦有無辜枉死、令人可憐者、如秦明之家眷、瓦官寺之
老僧、雖非手刃、然正如王導所云、我雖不殺伯仁、伯仁由
我而死、用事者不得辭其過也。又如扈家庄、己是通和扈
成、又將祝彪解來、却將他全家殺死、至于朱仝之小衙內、
更是可憐。又如魯達之在李忠寨內、擄而逃、石秀之燒
祝家庄、俱為不滿人意。本傳寫所殺人、或是害民、或
誤國、為公議所不容。其小者、亦是與山泊諸人、不是舊

此即是新眼。素懷怨隙。明作對頭。日但各有應。死之處。播之天理人情。必須殺之。而後快者。這方殺得。并無遺憾。方是真豪傑。舉動不是殘毒。不是孟浪。比前傳為更强也。此理。似此。似此。水滸の皮肉を食て。いまだ骨髓を食て。抑水滸傳。之等の深意あり。宋江をト久くして。百八名的好漢等。初各生出て。その身く。夏あるまで。みる一般の善人なり。既小夏あり。及びて。梁山泊。落草せり。もの文弱なり。奸智殘忍。勇悍なり。不仁暴行。一箇も悪魔。似たり。便是石碣。魔君を去り。應報の縁。ものして。宋江より。いまだ魔行を去らざり。又の香天行道より。皆魔心の誇言。必ず信ぜざれば。かして石碣天降。かれば。

過世の業因を料。解脫せり。その面目を改て。忠臣義士あり。かれ。一百八人。初善中惡。後忠の三等あり。さうある。水滸をスル。此の深き。分明なり。愛ものも。まじ。悟れ。識もの。い。悟れ。金の瑞を。醒いて。漫。水滸を評せり。當らげ。又只。金瑞。蔡。吳等。この名あり。を。悟れ。批評せり。の。後傳の。亦。之。明の。醉の。醒。推して。及。前傳の。寫。所。石。碣。猛。可。天。降。て。魔。君。を。降。伏。せ。宋。江。百。八。人。清。淨。之。派。の。勇。士。と。れ。宋。朝。の。為。死。せ。辨。せん。得。て。忠。義。を。盡。し。て。後。人。後。傳。を。化。を。及。び。て。先。く。の。善。を。會。得。を。活。残。り。や。之。の。好。漢。等。も。亦。同。前。不。臣。の。心。を。起。す。と。あ。く。い。や。登。雲。飲。馬。山。川。二。十。所。又。山。寨。を。相。構。へ。て。強。盜。を。し。さ。う。人。

官軍を撃退けて。勉て宋朝之有を突きし。その趣向に前傳の真面目を抹却して。蛇足の爲て更々似るを。蔡昊が評定し。その前傳の勝るを。評言し。李應孫立。七名堂を結び。夥を聚て。うさび賊の頭領するを。罪も然るを。殺して物をのこし。んや。と嗚呼かすたふ。あるが。前傳一百八人。初善中惡後忠の三等ありを發明せし。只是愚者の一得也。古人未發の明評ありや。四維貫耐。蓋なるを。皇國にまつをありとも。わがこゝも後傳の。那金瑞が石碣妖を同ふ始り。石碣妖を收る。終るといひ。謬説也。七十回。全書とあり。又宋江も。前傳に死する。四十許人。竟、後宋ある。子奸臣と陥れり。果敢て枉死し。中。この魔物の思報也。亦是勸善懲惡の。他方の用意こゝあり。

宋江も百八人。忠義を盡して賞をば。過半王事ニ死し。れども。舊惡竟と消滅して。忠信義烈。虚名とあり。世々看官。惜まら。前傳作者の本意し。先づこの意を會得して。後傳をば。前後の傳を評し。評六

あるの批評をえて。予といひ。や。公明の評論といふも。さて。腐儒の迂談といふ。宋江も百八人。忠義を有して賞をば。過半枉死を。めて。勸懲を正しくする。前傳他方の本意をば。蔡京童貫高休。高休も奸臣。必を誅されて。俱。勸懲を平ら。を。前傳も。い。を。後傳も。奸臣をば。誦罰せられ。且。蔡京童貫高休も。梁山殘餘の好漢も。茶鳩をば。非命に死。便是前後の傳の。舊惡を報し。大趣向。か。て。勸懲。遺漏あり。と。梁山百

八人の子の。その舊悪の應報ありて。那奸臣もよきものとならば。便是前傳の作者の脱落といふ。毎々の。かくても深意あると云ひ。おれをていひ。水滸の皮肉をも。又つもの。足下と限り。疑ひ。人みちある。抑蔡京童貫高俅楊戩等の奸臣は。皆是宋書と載りて。宋枯賞罰分明なるを。讀書の人の。よきとて。前傳は。他者かひく。罪せしめ。趣きて。字ぬ。水滸は。素より宋朝の奸臣の爲と作らば。百八人の好漢等の。列傳を。勸懲も。百八人の。よき。彼蔡京高俅。竟と終り。せむ。高俅。徽宗北廷の。沙漢。の。史の趣。宋史を。讓りて。字ぬ。迺作者の。依る。是。一大趣向。今世間の草紙の如く。婦幼。又。會得。その疑い。水滸。又。後傳。那奸臣が。譴罰の趣。字して。人

意を快く。書を讀む人の爲る。亦あり。前傳と後傳。作者の腹内。合。後傳。前傳。油。用心。初善中惡後忠の。三。山樵が。又。一書と。前傳と。兄弟。用心。飲馬川。一隊の軍兵。童貫の指揮。官軍と稱。且討平の大。李良嗣郭京。李應。撃。天子。有。飲馬川。他兵權。天子。奏。免

の家着を殺戮せし。李逵を罪せしめて知るべし。かほ又後傳の乘
廷玉をありしも。この兩人のいふも。梁山殘餘の好漢をも。怒りて和れぬを
いふ。官職を受宋の事へて。屢金軍と戦て後真陣歿。子孫を宋の
仕て。家聲を墮さばるとある。孝義両あつて。全うして。かづい感なく
扈三娘が送身して。梁山殘餘の隊に入つて。途に優てせしむる
べし。是より前傳作者の本意を。補ふにぬあつて。百八人の外をいへり。
乘廷玉を登雲山の山寨の五將ありて。孫立孫新阮小七等の諸頭
領を阿容と。他が手下に屬し。快ね写すぬし。縦乘廷玉に武藝を長て。
万夫不當の勇士し。天罡地煞の外人し。後傳に人寡くて。必隊に入
る。よも天罡地煞の下にあべし。ゆゑを星外の人をもち。登雲山の主を
する。前傳の意とよく差して。甘心をた返向し。蔡皇のこれより。はも

り。と。い。し。何と。え。え。こ。ろ。ゆ。い。お。つ。他。が。後。傳。の。批。評。の。ま。を。
誉。人。の。あ。り。て。賞。物。の。華。を。飾。り。し。世。話。の。ひ。も。方。便。あり。け。り。
い。原。本。を。引。き。て。文。を。易。し。る。如。し。答。詞。を。繁。く。し。て。妙。々。と。
書。し。る。べ。し。あ。り。下。に。自。撰。自。賞。を。も。ち。し。る。もの。歎。け。ぬ。原
本。後。刻。相。照。し。て。又。も。の。あ。り。と。い。は。し。ん。や。由。ひ。の。う。ぬ。漢。を。も。ち。し。る。
い。は。し。る。あ。り。り。評。九

前傳地煞勇婦の内。後傳まで残りしもの。顧大嫂一人。この勇婦。第二回。
孫新離潤阮小七等も。扈成を為す。毛身を撃てをぬきし。則
件の人々と。共得て登雲山の寨にありし。て。又。は。も。ち。し。る。最。後。第。四。回。に
至りて。軍中妻子をたのめ。為す。嫁娶の令ありし時。撰擇の後。完うし。もの。し。
又鬼臉見杜興。第四回。孫立に頼いて。樂和に書簡を届く。と。東。京。

赴ちて因依て獄に撃ちて彭徳府配刺を以時楊林と相共し馮舍人
并に淫婦玉城を殺し逃去て東人李應が隨從して登雲山の野に入
りし後その名をも出したるが最後暹羅國の臣位階の段に杜真公
孫勝より下第早位とありて驛傳俱兼都統制武毅將軍とス
たのち抑後傳殘刺の好漢三十二人帯びしを前傳百八人比ま
しとまじく扈大嫂杜真名前傳を看官とく知れしあるに後傳
も後傳までいさく後傳つたはしとて後傳の作者の字名を思
惟りしと十餘人の好漢等幸不幸ありり雜劇の俳優の必役
不足をりしものありん呵々評十

たが玉城が杜真の情を寄りし夏成よりし潘金蓮の故態を字
かくて杜真が玉城と馮舍人を殺し段に林冲が草料場と武松が嫂を殺して

兄の爲に心を雪やう。舊稿を字とし。毎回事々物々かのみ如く前傳の故態を
寫して相以て同かばらも。茶果の評といはばあり。その資けより飾辞あり。
かみ趣向のいふある。高前傳の塚を離して新音をなすまじき。こゝに
一はあり。杜真が婢駒を鬼臉見より。鬼臉見のこの回の傍の小思を権も。左右を
小指もして口を推廣げ。又食指もして眼を推しが因りて。ぶつとつてをなすを相
同。鬼臉見のこの。糟園第十五卷妖魅のこえより。杜真が相貌べうより。作
まじ。婢駒を肩よりあへん。や玉城の淫婦ありし。から醜郎の着想より。事の
缺る者ありし。ついで又ひらこい。前傳の。後十五。婢駒を短命
二帝といふ。この短命を字の如く讀て。まねて。後いふもの。命短し
と。婢駒を負し。必死。この短命。命の短たき。を。これを
世間の信諾を譯さ。命より。今も美婦の。を。を。を。

命よりやとりてまへに。短命の譯。水滸解をえりて。その陣号を杜真が
醜齋とす。阮小五が殺生好をも想像す。又阮小二が陣号を立地太歳と
す。その太歳。歳徳星君の大歳方とす。唐山きて太歳と名づけし。一
種の怪物あり。その太斗のてくちて肉もあり。田間をの土中とあるを。人さるべ
して堀起せし。蟻とて動くといふ。人かえれをたき。立地と崇あり。棲
霞の林果とりし。件の太歳を堀出して。烹て食へて。立地と死し。
秋燈叢話卷之四に又あり。阮小二が粗暴なる。譬はる太歳の人
り。是をたき。立地と崇あり。義を取て。立地太歳と陣号す。その餘も
百八人の陣号と愚考あれども。干し。かをもれが贅言。そは又別を
まへに。評十一
混世魔王樊瑞の事の錯誤あり。公孫勝を引出し。趣向巧きありし。公孫

勝。前作もはる。後より。只軍陣に臨きて。風を待と。魔法を降まのり。
まへに。宋江の下。第四位あり。智を唐山きて。儒者を画て。道教を推する。
故に。兵用の次第とす。原は方外の人なれ。位階のゆえ。相応か。あはれ。
他。深山坐谷を以て。浮世を厭ふのあり。好漢と共伯。暹羅國と赴ん
ど。妙を措く。かあはれ。李應。東玉とす。俱。異邦と赴き。残餘の
數も充んぬ。前作のゆえ。却て本意をたす。評十二
平和の身。のんがを求む。権且。郭京の身。さうして。建康を。王宣慰の
府中とあり。後。花婿の事。秦媚の事。花逢春。名を極む。えの伏
線。て。楽和の人柄。相応か。趣向。の伏線。巧拙あり。高き。伏
線。看官。心づかぬ。方外。の伏線。多く。待棋とす。後。竹子。地。伏線
二。所あり。段の。平和。の。い。と。評十三

郭京^カ建康へ赴く道中より旅舎^衣にて汪五物がねまゝの鶏を俱こち吐^吹り
時遷が祝家左の故態し只禍の甚かざらぬ又郭京が豊乐堡なる錢老が家子
宿き物主^カ前^カの女児の妖怪と漏^カれを禳^カ除^カんとす却^カ妖怪といふ徳^カれ段々
始り郭京の醜態を写^カを為^カりて錢員外の女児^カの爲^カに作^カ設^カするものなり
その女児の美^カかりし但^カ見^カあり且^カその妖怪の郭京を懲^カる時妖怪の言^カ我
是^カ北^カ坐^カ王^カ太子^カ與^カ你^カ女^カ兒^カ有^カ天^カ縁^カ之^カ命^カ故^カ來^カ相^カ聘^カなりしものあり
郭京が逃^カきし後^カ一^カ道^カ徳^カの法^カ力^カよりてこの物^カ怪^カ竟^カて退^カ治^カせられ
り其^カの終^カりを一^カ行^カりし^カを説^カし^カの錢員外の女児の事^カと蔣敬の水
厄^カを極^カむし^カ小^カ茅^カ菴^カの老^カ僧^カ淡^カ然^カの事^カを^カ在^カ第十^カ陰^カ徳^カありて陽^カ報^カの文^カなり^カ縦
一^カ部^カの物^カと干^カかぬ事^カも必^カその終^カりを詳^カりて説^カ話^カを明^カくし^カこの二
人の事^カと落^カ着^カたる^カ惜^カむ^カで作者^カの暇^カ筆^カし^カ評^カ十四

李俊が縹緲峯より雪を賞して石版の祥符をひく又夢を黒^蛸と
騎して梁山泊に到り宋江と對面していれり且童子が李俊を喚て王と
いひるも皆是後暹羅の國王なるべし前兆なり論るべし梁山
一百人^カ所^カ去^カ豪^カ傑^カし縦^カか^カ祥^カ符^カあり^カば^カ身^カ風^カ雲^カの會^カ衆^カと異^カ
邦^カ推^カ渡^カし且^カ多^カ國^カの内^カ亂^カを^カ治^カり^カ王^カなる^カも^カ亦^カで^カ成^カり^カは^カる^カあり^カ
げ^カべ^カし^カる^カ先^カか^カの^カ如^カし^カ祥瑞^カを^カ写^カり^カて^カ伏^カ綿^カと^カす^カ作者^カの^カ腹^カ肉^カを^カ推^カ量^カ
る^カ李^カ俊^カ前^カ作^カ天^カ罡^カ三^カ十^カ六^カ員^カの内^カに^カて^カ第^カ十^カ八^カ位^カあり^カ且^カ看^カ官^カの^カ員^カ
員^カの^カつ^カぬ^カ役^カを^カし^カつ^カを^カ後^カ作^カ拔^カ萃^カして^カ第^カ一^カの^カ人^カ物^カと^カる^カを^カも^カて^カ初^カま^カの^カ
祥瑞^カを^カあ^カり^カし^カ字^カも^カあ^カる^カ李^カ俊^カ貫^カ目^カの^カつ^カぬ^カ故^カし^カ是^カ又^カせ^カつ^カる^カ細^カり^カて^カ己^カを^カ
は^カり^カ待^カ候^カる^カ看^カ官^カあり^カぬ^カ心^カ地^カま^カし^カよ^カも^カい^カへ^カる^カ李^カ俊^カ宋^カ江^カの^カ死^カ友^カあり^カ
む^カの^カ事^カと^カ垣^カを^カえ^カる^カや^カ宋^カ江^カを^カ又^カた^カら^カぬ^カもの^カなり^カい^カふ^カれ^カ宋^カ江^カの^カ徳^カなり

李俊を愛して。夢を托して後々の吉事をかく告ぐらん。ついでに
え。終を蔡昊が今回の評。忠義堂之石碣。鑽入地底。縹緲峯之
石版。落在山根。忠義堂石碣。是作一番收熟。縹緲峰之石
版。却作全部提頭。用各不同文章。亦思最好筆。といひて
心ゆく。上も取し。前作忠義堂の石碣の熟を收り。宋江
も百八人の忠臣をさし。全部の提頭も。亦くは籠り。石碣の始終
前作より事果る。又後作の用も。石碣材を写し。且李俊が祥瑞を
ゆる回。石版祥符のてある。や石版を金牌寫すも。黄紙の霧筆を
つ。別仔細をたし。か。後作の作その初。中。忠後忠の三。号
あり。故。か。意氣をひま。石版の。就中甘心。評十五

李俊が童成費保。倪雲高青号とも。常州の城内とちびて。元宵の

李俊費保
秋成素より
武勇の少あり
公人あし
三人は
あし
を
は
て

燈籠をえ。目大守の囚。獄繋れる。夏之趣。前作。宋江が。小
小。龍山を觀。故態を。末半段。か。の。李俊が高
青の諫を聽。進。常州へ。赴。為。其の勇。あ。い。欲
所。小見。具。異日。暹羅王。今。い。蔡昊が細
評。李俊。孩。見。態。之。畢竟。樂和。計。李俊を極。い。懲
遂。金。龍。場。赴。人。作。は。目大守。丁。廉。訪。が。奸。思。い。懲
て。人意。快。も。深。意。味。も。又。あ。評十六

童成倪雲号。李俊を極。い。為。目大守の末。所。賂。銅。三十貫を調
達。して。猛。海。賊。を。段。樂。和。花。逢。春。号。環。あ。せん。初。善。中
忠。後。忠。の。上。も。て。趣。向。の。段。重。計。本。一。頁。あ。文。を。写。易。て。
前後。多。了。卷三。第九回。三十の。且。二。句。の。増。補。也。縦。談。世。事。壹。應。缺。説。到。

左より、四丁の左まで

第一回内の
詩句子録
林家侯舊
識名話到
人情劍欲
鳴と不詩
句あり
第九回
是下
増神
多
易
句を再出
るふ
之用の増神

人情劍欲鳴。れし。明板の原本。第八回の末の段。樂和と童威と。料え環
會ののま。ま。談話と及ん。かくて第九回。至て。初段より李俊の始末を云
と写つて。して童威樂和等。あつた。と。及べし。終る。童訂本
ホ。九回の初段。童威と樂和と。先あ。の物。を。して。李俊の再傳を
写し。の。文の。信。杖。を。あ。け。し。畢竟原
本。第十回ある。物。を。第九回の初段。引。あ。げ。の。相。同。と。
向。茶。日。茶。第十回の總評。前。回。樂。和。童。威。後。重。叙。李。俊
始。宋。中。回。若。干。車。跡。妮。妮。四。五。十。言。入。此。回。只。用。一。二。筆。便。輕
輕。掉。轉。接。得。毫。不。費。筆。力。只。如。一。氣。呵。成。全。無。扭。捏。牽。挽。痕。跡。
此。等。筆。力。豈。尋。常。捍。康。家。所。能。と。い。う。筆。削。り。を。自
賞。不。も。る。か。原。本。と。い。う。も。あ。じ。も。い。え。と。い。う。誇。説

又三鯨。い。ま。い
4の。鰭。を
あ。て。食。と。ん
あ。故。糞
この。鯨。の。鱗。は
糞。う。物。を
食。て。肉。は。し
蓋。熱。氣
を。ま。て。う。う
やし。ま。の。の
突。こ。是。一。大
奇。異。と。い。ふ
後。傳。の。他。を
か。こ。と。を。い。ふ
杜。撰。を。多。す
ゆ。り

と。い。う。評。十。七

花逢春が海船内を。鯨を射。光景。七。父。花。采。の。故。態。を。写。し。親。子
る。れ。ら。あ。え。し。ち。れ。も。鴻。雁。の。優。美。る。ふ。及。ん。の。時。鯨。の。腹。内。二。三
船。の。癩。頭。元。鬼。あ。り。て。さ。消。化。せ。り。し。を。あ。い。甚。だ。謬。説。し。唐。山。の。文。人
。海。錯。の。と。疎。く。鯨。は。只。鰭。を。食。餌。と。ん。他。魚。の。口。中。入。る。あ。れ。ば
。潮。吹。穴。敷。り。吹。出。と。り。三。船。が。う。る。癩。頭。を。吞。む。あ。ん。や。笑。ふ
。の。後。花。逢。春。暹。羅。國。を。も。ぐ。射。藝。を。あ。い。り。家。業。を。れ。ば
。燕。青。も。又。さ。る。う。り。前。傳。の。多。く。あ。い。づ。け。り。評。十。八
。李。俊。が。金。鼈。嶋。を。し。ち。う。て。の。物。は。し。乗。り。て。暹。羅。の。城。下。攻。入。遂。に。和
。議。成。り。て。退。り。て。金。鼈。嶋。を。守。り。ま。す。の。物。う。り。大。く。尋。常。を。あ。つ。て。は。を
。と。う。り。か。く。神。醫。安。道。全。が。高。麗。王。に。療。治。を。せ。し。徽。宗。の。勅。命。と。う。り

盧師越と俱に朝鮮よりかきしるの船金鰲嶋の頭りて覆り。料らば
李俊と救して。七日あり逗留し遂に汴京へ歸り。後李應乗廷王
その衆好漢を倡導して暹羅へ赴く伏線あり。聊る仕場をばし。
前傳の故態を做ししるるれ。なりて。ちり。その後安道全。盧師越。
媚しての奸計と漏れ。遂に亡命して聞煥章と遇し物あり。前傳の
壙を離れて終り成り。しる。蕭讓金大堅。連坐きて配刺せられ。
家眷。聞煥章と養う。ことごと。巧るふあり。勦く鬪りてかれ
ら。かて又載宗の再傳及びして童貫と使使せり。ことごと。後の
か軍が。載宗の非優あり。必役不足をり。又聞煥章。前
傳と後傳も。因るなる。且初に高休が恭謀あり。平北故あり。
と退隱する。この。聞煥章を作り。後傳の女史を李俊の妃。

きんめい。後傳の作を。産せりて。唐山の勇將の事あり。ことごと。か。伏線
あり。この。苦心あり。推量あり。宋朝の奸臣。趙嗣良の要策を信容して。金剛を謀し。令し。遠をせん。物あり。
あり。亦呼延灼父子。朱全王進を。引ち。た。為る。い。か。め。あり。
あり。長を。二帝北遷の物語。虚実相半。讀史の。誰。知。此。短く。字を。他。の。を。た。の。長物語。
あり。前傳の。他。を。字。を。知。る。を。是。妙。作。所。以。評。九。蔣敬が江中。陸祥張徳を。刻。され。江水。身を。投。辛。く。死。う。ハ。
い。も。ある。物。あり。奇。と。足。る。也。後蔣敬。浚陽樓。宋江が。反詩を題。し。又。亦詩を題。し。勉。り。前傳の照應。と。日。と。趣。向。も。前傳の作者の意。稱。べ。も。あ。る。上。も。い。て。

宋江が反詩を題し、そのもと唐の黃巢はるをくもするを、その本心はあはれ。
皆魔教の所為マキ。當初宋江は、晁蓋等七人の必死を救ひ、梁山泊へ誘ひ
つらせり。以来、忠義堂は石碣降り、招安をあまじく、多人を麻鬼あらし
むの故、三叶ミツハは仁義忠信と説けども、道は梅家のあまじく、澤陽樓の
壁は反詩を題し、或は秦末明の妻子を陥れ、見くくむ。或は朱全と山寨へ引
入れ、為る。兵用と計り、李逵は小衙内を殺させ、或は盧俊義を引入れ、小
計り、罪に陥れ、後、極ひしむと、故、奉るは追あはれ。宋江は、かくの如く、の
餘のいもの火を放ち人と殺し、物もせり、みは魔界の悪行あるも。
宋江は殊に、朝廷を敬ひ、連り、小招安を願ひ、さく、本心はあはれ。
譬は狂人の醒るおら、本心は反を如く、そのいものを、水滸傳を足る故、羅貫
中、水滸傳を、傳へ、悪報し、子孫三世啞らし、を、通考、續文獻、かて

宋江等の百八人、魔教既消滅し、真の忠臣小形し、後、その送るを拾ん
為る。後傳の作あとも、澤陽樓を題し、反詩を、引て、舊の魔界キコを、
也、然る、照應テウエイせ、故、前傳の作者の意、稱ふもあはれ、西遊記を
とし、い、あはれ、三流法師が、孫悟空の諫を、用ひ、却て、地と、遂退
け、ハ、仏法は、障礙を、魔王の為、魅せ、其の本心を、喪ひ、故、只是、宋
江三流の、今、い、人も、家眷良友の、諫め、用ひ、其、短慮
と、事、後、い、悔、み、み、魔教の、致、を、所、を、慎、む、死、を、い、は、れ、の
懲言コトハ、姑、措、き、さて、蔣敬、澤陽樓、料、を、穆春、再、會、つ、ま、り、
那、陸祥、張徳の、宿、を、自、願、し、穆春、遂、蔣敬、と、俱、る、其、如、に、到、る、
張徳、既、陸祥、を、殺、し、張徳の、妻、を、す、陸祥、と、密、通、を、つ、り、あ、れ、を、
そ、か、ま、し、く、あ、ら、け、る、穆春、を、責、懲、り、悪、意、を、送、り、白、状、致、を、や、り、這

件の悪棍。焦道士。袁愛泉。竺大立。并は朱元等と鹿金シテコシ小寺為体。武松が
鴛鴦樓の趣は。似れども其の勇ましく。且華やかといふ。
蔣敬の驚死イタツキトシも。病着早は瘧オカメりければ。兩人や立坐て登雲山赴きて俗ヨコま
世話場セウワバで生きたる。凡の両回十六十七。故意前傳の趣は應照ウツせとる。自然は
似る処あるのコトも。評二十

この時登雲山の寨は。官軍の大將郎瓊ニシ。二十の兵馬を領て。登青萊の
都統制と俱に推よせま。日一夜攻めんと間敷る。只青州の都統制
黃信鎮三の病は推け。官軍は加。浩カハトコは蔣敬穆春の兩
人。登雲山の寨は朱元ければ。則ち扈成の計策も。蔣敬を偽ニセ黃
信シと。穆春とも三四百名の雜兵を従。寄の陣へ追。合戦の
時裏ウラ伐キリさせ。大將郎瓊と撃捕。寄の士卒と鹿金シテコシも。是も亦

前傳は。宋江が奏ホ不明と降せ。偽奏明と作り出。計略と相似る。只その
差別ある。扈成は後傳に至る。智の増せと。兵用と伯仲も。嚮ムカふ來
廷玉は説薦り。夥計は引入れ。今又偽黃信と造作。大敵と
をばげ。樂和と扈成はオオ字の樂和扈成はあ。その用と。用ひ
ゆるるのコトも。亦怪むべ。評二十一

扈成は計略も。黃信は奸臣と疑れ。罪せられ。折。登雲山の寨も。
穴アナ竊は蔣敬を遣。黃信は説薦り。身方は引入れ。み。前傳の舊
稿より。孫立安道全も。蕭讓金大堅の為。安道全并蕭金二人此
時既登雲山に在り。
穆春と聞煥章の宿所へ遣。その家眷を迎。折。聞煥章は。その女兒
聞小姐の。就。悪棍焦道士は逆公夏と。その禍を避。華州金の
家眷と共に聞小姐を。登雲山の寨へと頼遣。その焦道士の誣言シゴトをいひん

とく。東京へ去り程は。楊春ハ途少く。焦百鬼を見知り。殺し野中の井
沈りて。用煥章ハ知りて。東京へ還り。焦百鬼を待たせり。他が告
訴のふれば。ちよ登雲山へ赴けり。竟よその隊は。みまを己とせり。
ちよゆく。且そのゆゆ融り。蔣放と楊春。登雲の野に。後其の兩人ハ
一役つる。作老のそを賞けり所。評二十二

されし。後金兵入寇の事の趣。上も粗い。その間。呼延灼の再傳。
その子呼延鈺の傳に至り。用煥章と。呼延鈺の文学の師より。そのをハ
その時。用煥章ハ。不東京より。其のち金軍。後同の伏線。又徐寧の子の徐晟が
入寇の。呼延の家を。登雲山へ赴けり。初と世の段。童代の甲。唐猗と。光棍を。来り途中。初呼延灼の對面
初と世の段。童代の甲。唐猗と。光棍を。来り途中。初呼延灼の對面
〜竟甲と。復〜為体。看官ハ懷舊の涙と。拭せんと欲せり。趣向ハ
いと愛し。ちよ。其の甲の。其の段の。後々至る。何の益もなき。

惜しむ。其の甲と。暹羅困り。有用の物。前傳後傳。終始相慮。
工夫。事。及。樞。珠。類。評二十二下
呼延鈺。徐晟。義を。異姓の兄弟。各々親の。義。嗣。智
勇兼備の為体。三国志演義。寫り。用興張苞の餘韻あり。愛
〜。宋の十將。黄河。金兵。防。汪。逆心。呼延灼隊
ち。破。金兵。竟。黄河。渡。光景。実録。彷彿。自然の如
〜。呼延父子。徐晟と。朱全。以。既。飢渴。及。山中。獐を
射。飢。欲。其の時。料。萬慶寺の。僧。殺。ハ
後回の伏線。朱全揚林。相遇。飲馬川の寨。赴。李應の隊。ハ
加。夏。己。一段の佳作。この次。萬慶寺の。曇。化。和尚。
金の大将。幹。離。不。降。參。五。百。の。兵。を。乞。催。身。の。兵。を。合。

飲馬川の山寨を攻め、朱氏が計策小より。萬慶寺を焼毀せし。曇化を
退せ。遂に曇化を生拘り。悪僧多しを殺し、弾せし。段ハ李應の武勇。朱武の
計策。并に呼延父子。徐成朱全等。もろく山寨へ到来せし。一掃せし。
作、設けし。切場えい。あはれい。味ひし。かく曇化を焼殺す時。明板の原
本ハ樊瑞が封合龍の偈あり。重訂本ハいなり。感は過ゆると。蔡
昊が削り去るなり。むろり。評二十三

宋の宰相李邦彦が和議を主るより。三鎮の地を割に。一百万の金子。五百
萬の銀子を。金朝小與へ為す。諸州家家の金銀を。とせし。四散令
あつし。多くは。金子を調進し。罪せし。あつし。故ハ小旋風
柴進も。又滄州の牢内に移されし。この時滄州の太守高源ハ。高廉の弟
と。柴進を殺し。兄の仇を報んと欲し。飲馬川に。李心等

兵を發し。滄州城を破り。柴進を極ひ出せし。先戴宗を遣し。
いと柴進は告ぐ。城門堅く閉れ。速に入らむ。かく李心
等滄州城へ推せし。攻めし。急心せし。高源先柴進を殺し。寄
し。退けし。節級牢子等。分けし。下させし。吉字と
し。節級。遠謀あり。段を以柴進を極ひ出して。唐牛児の居
宅を之のせ置く。段ハ吉字が牢子等。欺人を酒と飲せ。今晚柴
進を殺せし。その用意せし。柴進敬馬川の。甚し。乱
し。此段蔡昊が評。醜然。是人情とあれ。涙白水の湧く如く。
悲泣し。命を惜ら。柴進ハ似けを。大丈夫と。是
は。人々。稱ぶ。写す。高源ハ。飲馬川の守り。亡
れ。柴進ハ家眷。并に吉字唐牛児と俱に。飲馬川へ。あつし。

俊為。暹羅國の功臣。其の思意。因圓の評内。具に述く。評六。
戴宗飲馬川に歸來。燕青が所望の銀子。どのひれも。金の大将捷懶。宋の人犯を收
管。大名府に退死。燕青。又戴宗楊林と俱。大名府に到。莫氏盧俊。盧氏の
二安人を贖せ。折大刀関勝。偽齋席劉豫を諫めて。身退んとつ。劉豫
怒。関勝を獄に繋ぎ。竟に刑せんとす。燕青三人。駑馬を愛ひ。極ひとんと欲
せり。謀の出る。所。一日。酒店。東牛皮巷内。第三家。押某とよ
か。酔く送。木夾ツツサウと。燕青を拾ひ。金の大将捷懶。宋の人犯を收
戴宗楊林と。義局を打扮。城に入。かの木夾を證驗と。関勝を救取
る段。前傳。李家庄。兵用。偽使。李家と杜興と。身方。引入れる。
奇計の舊稿。後。用。空。且前傳。燕青。其一部。中。秀逸。上。し
語。も。通。と。ある。照應。とい。と。出。ま。る。燕青。再。傳。これ。一部。中。の。秀。逸。上。し

既。評。や。燕青。前傳。十二分。の。愛。敬。あり。本傳。は。い。よ。く。看。官。は。嬉。し。から。る。
且。本傳。も。秀。逸。な。れ。宋。安。平。花。逢。春。と。除。の。外。燕。青。も。暹。羅。王。を。死。せ。し。め。り。
亦。あ。つ。た。も。な。ら。ず。後。本傳。の。ま。ん。も。後。は。彼。王。も。字。が。あ。い。う。も。あ。る。べ。し。今
は。其。益。の。教。員。言。は。れ。思。ふ。事。も。具。に。述。ぶ。人。に。れ。ど。也。評。二。七。
金の大将。劉觀。張信。畢豊と俱。三十の大兵をも。飲馬川の寨を攻撃。段。飲
馬の衆好漢。登雲山。孫立。兵を合せんと欲す。伏線。且。関勝。王進。を
新。加。入。せ。り。一。役。は。ん。と。の。こ。ご。へ。萬。慶。寺。の。舊。趾。に。地雷。火。を。く。全。勝。を
以。ち。為。体。し。人。意。を。快。く。あ。る。の。を。い。く。評。二。八。
李。心。全。の。衆。好。漢。竟。に。飲。馬。川。を。棄。れ。南。へ。赴。く。軍。陣。の。道。中。南。北。交
界。の。處。に。金の大将。烏。禄。大。營。と。對。陣。し。戦。ん。と。欲。す。烏。禄。は。宋。の
降。將。任。約。が。計。を。あ。り。固。く。守。り。出。戦。し。燕。青。又。か。の。木。夾。を。く。金。營。に

今。金の元師捷懶の使と唱へ鳥祿は汪豹を疑せり。竟は鳥祿を撃走す。且汪豹を殺す。黄河は金兵を倡導す。汪豹を雪は段。汪豹立意味あり。趣向あり。やね。件の本末あり。至る。用とて。李心も三百隻の大船を獲て。南河便り宣し。全勝あり。必あり。人。李心も河を渡す。楊劉村に陣し。時。蔡京童貫高休等の奸臣。汴京を敗れ。時。配刺せり。とも。四の乱は。遠く軍州に到り。終御村に隠れ。李心も宰相あり。及び。備州へ配せり。道中。金宮を避る。為。中。午。縣。東。到。夜。李心等の衆好漢。他。陣中。招。酒。竟。の。罪。責。責。酒。伏。殺。段。前。他。以。来。の。冤。伸。人。意。快。蔡。京。童。貫。高。休。蔡。攸。蔡。京。等。四。人。梁。山。殘。餘。の。好。漢。宋。江。と。茶。鳩。等。惡。報。と。示。後。

傳は至りて。亦是勸懲の大關鍵。心あり。勿論正史の合ども。亦。物。倍。の。之。氣。関。勝。も。正。史。の。劉。豫。が。為。斬。れ。と。あ。燕。青。故。を。讀。史。の。後。釋。説。と。名。立。定。分。明。作。者。の。そ。と。知。又。飲。馬。川。も。登。雲。山。も。皆。是。梁。山。の。殘。餘。也。登。雲。山。ハ。星。外。也。采。廷。王。主。將。と。の。故。本。心。隊。燕。青。戴。宗。呼。延。灼。関。勝。樊。瑞。公。孫。勝。朱。武。朱。全。等。の。衆。好。漢。也。四。奸。臣。の。積。惡。を。攻。也。且。太。祖。皇。帝。の。旌。言。碑。の。第。三。條。大。臣。罪。あり。刑。戮。を。と。れ。と。あ。れ。と。刀。劍。を。殺。せ。鳩。酒。を。灌。て。結果。は。段。是。を。名。り。と。め。蔡。京。等。を。宿。せ。折。燕。青。と。相。識。葉。茂。と。し。の。差。采。の。夫。役。也。他。盧。俊。德。の。隣。舎。を。折。燕。青。料。ら。再。會。也。折。則。葉。茂。が。口。を。折。蔡。京。高。休。等。の。此。具。を。知。れ。も。自然。の。如。又。樊。瑞。が。押。差。官。を。面。比。せ。つ。執。し。李。心。も。舊。怨。を。速。く。北。を。向。ひ。并。奏。を。刑。せ。字。を。か。妙。也。但。本。子。

呼延鈺徐晟宋安平者三人脱れ梁山泊の頭より到りし時既に飢渴及び
水邊の酒店より立ちて酒飯を喫りけり酒保蒙汗菜を以て昏倒
致す盤纏も駿馬も奪んとせし折りの武太郎の爲に好夫を令んと欲す鄭哥
食客小形者此の酒店に在り二少年の凡人を以てせんく解茶を以て
救ひ醒しむるを以て一段前傳朱貴の水亭の舊稿本傳は蒙汗菜を
用ふ如く樂和を死逢春二茶人を極ひ出せりと他の一二ヶ所あり蔡
晃が評も前傳の蒙汗菜ハ財帛を奪ん爲る善人を昏倒せしむる
本傳の蒙汗菜ハ善人を極ふる悪人を昏倒せしむる勝北齊といひり
この酒店の蒙汗菜を以て悪人を昏倒せしむるこの茶酒を以て夏觀
面よりけり前傳より用ひるを又折ぐると本傳より写せり
此の呼延鈺等の三少年心をも酔臥せし奇りて蒙汗菜を以て知れり

第一回阮小七が梁山泊并祭の段にこの宗江ホテ唐像の
中初建あるに阮
七が并頭のおより
ふに至りてみれば
十二年を以て経る
後を算算の四十年
かへりて十年経る
合するに不都合
合するに不都合
合するに不都合
合するに不都合
合するに不都合

関を以て少平ハ似たりとて這水亭ハ宋江が小頭目なり江忠といふの酒店を
その身ハ梁山泊なる宋江の廟を守りてなり江忠といふ宋江の忠臣といふもなり祭
是が評も見えり御向は徽宗の勅建なり宋江は死没の好漢の爲に梁山泊の
廟を建立せり各位の塑像を指し呼延等三人を以て鄭哥を御導小
を梁山泊に登陟し江忠は對面し件の神前を展け五両の銀子を以て福物を
備次の目祭奠せしむるの段ハ懐舊の情文外ありて看官浩嘆せしむる
写しはむ妙なり此第一回阮小七が梁山泊に登陟す時此の廟にいざあを
建れざるべしと作老のくちりて一筆を以て指さる故に詳しむる也抑此の
宋江の廟のくちりても多し寓言するもさる所縁あり也按仁和郎
瑛水滸傳像贊序云史稱宋江三十六人横行齊魏官軍莫
抗而侯蒙舉討方臘周公謹載其名贊於癸辛雜識羅貫

中演テ為ル小説ノ有リ替テ天行道ノ之レ言ハ今揚子濟寧之地ニ為シ立廟ス緣シ是逆料シ當時非禮之禮ト非義之義ト江必有之トいへり宋江の廟トと
そのレをレ多クなるハあリしト評ニ三十一

呼ビ延シ三人江忠が酒店ニ逗留スの日昔年鄆城縣の都頭ナリ趙能が兒子ト
綽号ト百足虫トと喚ク悪棍御官指揮使呂元吉の女見の二親トを喪ヒて落シ
人ノよりシと搔ク擽クひテそのレハ黄馬トを騎リて來リけレと呼ビ延シ鈕ヲ徐晟斫殺スと
呂小姐トを救フ段百足虫トと馬トを乗セりテ後ニ呂小姐トを騎セん為ルと蔡日天ガ
評スええレれトかラ恩棍の騎馬ヲ騎リハ新奇ト當時駭レ貨馬トをレいハるレ
せられハもあリしハ呂小姐ハ疔贅ナリとテうテも夏ノ消シむノもあリしハ後ニ小蛮女ト
を呼ビ延シ鈕ヲは毒ナリと嫌ヒあリがレかラ厄會トを写シてレんハはれキもあリしハ王婆ト
はレらレあリしハ呂小姐ハ介添ヲをレいハるレ又鄆哥ガ毒トをレいハるレいハるレいハるレ

いハるレ後ニ共濟の女見ハ毒ナリと伏線ハをレいハるレ例ノ待テ棋ヲをレいハるレあリしハあリしハ
約束ヲあリしハと欲クしハるレ癖トと見えテ約束ヲもテもレいハるレ強ク言ハと設レハ待テ棋ヲ
多クちカらレと拙ク又呼ビ延シ鈕ヲ江忠ニ諫スてレは年ヲ老シりテ西ノ事ヲをレいハるレ五百
兩ノ銀子ヲ贈ルと老シてレは頭ヲをレいハるレ後ニ鄆京ノ贓財ヲをレいハるレ江忠ハ取リてレいハるレ
すレあリしハそのレもレ強盜ノ夥ク中ニ在リしハ見テ鈴ヲをレ盗ミ耳ヲをレ賽クふレ似シ
とテいハるレあリしハいハるレ評ニ三十二

江忠の酒店ヲ鄆城縣ニ宋清の宿所ニ遠ク住ス呼ビ延シ鈕ヲ徐晟鄆哥ト俱ニ宋
安年ハ倡道スれテその居宅ニ赴ク宋清夫婦ハ母子安年ノ逐電ヲ咎メめテ
合シて城内の字裏ニ在リしハ宋安年ハ悲泣シ境ヲをレいハるレ呼ビ徐ヲ慰ムりテ還道
村ニ九天玄女ノ廟ノ道院ニ退シ計謀をレ疑ヒ段ヲ九天玄女ノ廟ハ亦是前例ノ
照シてレ呼ビ徐ヲ李ノ迹ヲをレ莫ク登州と投テ立シ折シ李ノ一軍ハ遇シ着シて

と告ぐる。李心等則宋清と極ひんとす。鄆城縣の城を攻破す。金の
知縣郭京と生拘りぬ。郭京ハ。嚮ハ京城を逃去り後。金宮に投降
す。此の地の知縣に任ぜん。因煉使曾世雄と俱に。鄆城縣の守護
也。又件の曾世雄ハ。前代ハ見え。曾頭市多。曾朝奉の孫。曾滄の子
多けれ。宋清を殺す。舊怨を復さんと欲すとある。亦是前代の照應
也。又其の事ハ。宋清夫妻ハ牢裏にあて。いぬ日曾世雄。那夫婦を解
濟州に赴行とせしむ。李心等先郭京と去り。玄女廟頭に此セ
也。是より先ハ。朱全ハ家来目と迎んとて。其の故郷へ赴行よ。久信あり
され。李心等。路程の便宜に任す。戴宗と楊林と遣り。朱全雷
横の母親。雷遊うも伴んと。遊うが姪うけ。錢正嘴の居宅よ此
折。錢正嘴よ告訴せり。金宮に囚れて。宋清夫妻と一所に置る。

是より先ハ皇甫端也。金宮に陥り。元本ハ阿黑麻也。他ハ名ハ馬。馬医と云ふ。此の
事。皇甫端程ハ。宋清朱全對面。是より使目と送る。かき皇甫端が外
出折。戴宗と楊林。料らむ。再會す。宋清朱全の消息とせり。呼徐西の
奪去る。名馬の贖料と。阿黑麻三十五員銀を求む。此の銀子と調進せられハ。
宋清朱全ハゆき。とより。戴宗楊林ハ。よと李心等ハ
報せ。郭京贖財二兩ある。身一千五百兩不足と。とより程ハ。阿黑麻ハ
戰船と造らせん。為ハ。啓行。曾世雄ハ。宋安人を押さ。件の銀と合
とせ。則燕青が計。李應等先より迎。遂ハ。曾世雄を
殺戮。又郭京ハ。汴京を陥れ。四罪を責む。首を刎ね。曾世雄
俱々來。三百名の雜兵の。帰降。けと。御導す。関勝楊林。呼
延鈺。徐晟等。濟州城へ遣。曾世雄ハ。來れ。偽城入り。城

林朱全の家小
の對面せし段
中養食娘小所
ありしと至て
名茶人と雷
のやとて
つるの春香娘
中衛家財を
どこのかへ
見せしむる
只作女を
許すやと云
張編の
多し

將午都監并は金兵を剝減して宋清朱全自王甫端と極む。又揚
林朱全、鄆哥等、那錢歪嘴の宿所は到る。錢歪嘴と其妻巫氏、
破殺を雷婆と救ひ、叔朱全の妻朱恭人并は雷婆と俱く。玄女廟に
ひて束ぬ段。或は前傳の舊稿、或は本傳も、前回は似るる。あれは、
けぬ。その中、阿里麻三十五百の銀と求ると云ふ。李忠等、郭京が賊財
の銀二十兩、あれも、その數不足も、戴院長に到り、登雲山、拿來、纔可足數。
不知八日、可往還、麻とある。李忠等十數名、好漢、飲馬川の
山寨を棄て、一、千あるの兵をあるべし。その時、軍用の銀子ありて、
戴宗と登雲山へ遣へ、宋廷王孫立等、それを借せんと欲せしむるは
く、鄆哥、燕青、莫氏、盧氏、金宮より償取ると。戴宗と飲馬川へ遣へ、
李忠、銀子を借せし時、その銀早よと來つる。その折、その財帛の此も、

故のやあ。作者は問む、知れざるべし。評三十三

李忠、應答、ハハ、勤王の志念あり。畢豊を殺すの後、ゆゑに
金の大兵の寨を攻んとす。飲馬川を棄て、竟は南へ起所、ハ
酒飲馬の山寨の畢豊を始り、畢豊は終る。對照ん、李忠等ハ
志願の次、與を頼んとす。宋澤ハ世と去りて、張所ハ配刺せれと云え
し。望と失ひ、遂に登雲山の寨に赴き、宋廷王と兵馬を合し。その
進退を定むる。安道金が計謀に任り、金教忠嶋に推渡り。李忠、俊と一緒、
ろ、ま、と、渡海の船の多し。金の阿里麻が造り、五百騎の大海鯨、大なる
を奪取て、飲馬登雲山、好漢等、皆大洋に渡む段。或條、少見れる。長
物造、の一舉、輕と括り、叔しを筆、その中、呼延の家眷と、周煥、章、父女
二人、あの方、ゆる、登雲山を呼延、父子、あ、いと、又、飲馬川、山寨、初

裴宣が。二百人の嘯囉コラスヒトと聚てあり。余後李子應、楊林、杜興、蔡慶の衆好漢相加りて。程遠くぬ龍角岡。畢豊を襲ひ敷き去りし。寨を奪ひその衆と合し。李子應を推て寨主とす。第五又登雲山なる寨ハ。なり。鄒潤が。一二百の嘯囉と聚てあり。余後孫立、孫新、顧大嫂、阮小七等。來廷玉、扈成と俱に相加り。竟に來廷玉を寨主とす。第三回。第三十回に至り。飲馬川登雲山の好漢等。寨を棄てり。共小大洋の流り。是前傳の舊稿。梁山泊の初。王倫が寨主とす。王倫竟に林冲を殺り。晁蓋、宋江、寨主とす。余後宋江、百八人招安あり。及て梁山を棄て。京城に赴り。晁蓋を討ち。方臘を征し。その事あり。その事あり。趣向を前後一致にせらる。本傳と。濟水滸他といふもの。その事あり。相似く非ざる。評三十四

はし本傳三十四までの趣向と思惟。大凡良友義兄弟の厄難中小隙し。辛くも救ふ外。又殊る筋あり。先第一回。阮小七が。石碣村多宿所を張幹辨を殺せり。母親も俱に亡命也。路を母と失ひ。鄒潤の山寨を。再會せり。初後吉。又扈成。財宝と悪人毛身を奪れり。鄒潤阮小七孫新顧大嫂等。扈成を為し。夜敷して。毛身を殺し。財宝と奪り。第二回の縁坐あり。病尉遲孫立。登州の楊太守を搦捕し。牢内に在り。孫新鄒潤阮小七等。扈成計を伴。統制來廷玉と説降せ。遂に登州城を攻破。孫立を救ひ出ぬ。第三杜興孫立を頼れ。樂和と書翰を届ると。東京に到り。王都尉の府内を搦捕し。彰德府を刺配せ。楊林を再會し。俱に馮吉人と玉娥を殺し。官營李煥が為し。怨を復し。魁て配所を逃れ去り。自救。第四回。李應ハ杜興の縁坐し。濟州の知府を搦捕し。牢内に在り。楊林則

裴宣ハイセン杜興トキウと俱ト計ケと定サり牢ラウ子シは蒙汗茶モウカンチャと飲ノく昏倒コンタウさせり。竟キ李リ應オウを救クひしめ。第六ダイロク秦明シンメイの妻メケ花栄カエイの子コ花逢春カウフチュン。萬柳庄マンリウシヤウは在アり。時トキ建康ケンカンの王宣尉ワンケンイ。郭京クワクワンはそこのりて。件ケンの二恭人ニクワンニンと。花逢春カウフチュンを搦捕ナツツせり。樓上ロウジョウは閉ト籠カりし。樂和ラクワが計ケす。王宣尉ワンケンイと郭京クワクワンのありし。時トキ汪五狗ワンゴと。看守クワンシの養娘ヤウニヤウも。蒙汗茶モウカンチャを飲ノく。昏倒コンタウせり。秦花シンカの二恭人ニクワンニンと。花逢春カウフチュンを救クひし。花ハナ。第八ダイハチ李俊リシュンが元宵ゲンヨウの燈籠テウロウと銀ギンと。常州チヤウヂヤウの城内チヤウヂヤウノシラカ入りし時トキ。賈保狄成キヤウボウテキセイと俱ト。呂太守リョウタウシヤウを搦捕ナツツせり。牢内ラウナイは在アりし。樂和ラクワが計ケす。花逢春カウフチュンと王輔ワンボの子コ。王朝恩ヤウチウオンは打扮イテマせり。その餘オノノのものは皆トモトモ伴當バンタウを打ウ拵ケす。常州チヤウヂヤウ城シラカは赴ツき。呂太守リョウタウシヤウと欺ウけ捕籠ツツカて。必カナラひのありし計ケひて。李俊リシュンと賈保狄成キヤウボウテキセイを救クひし。第十ダイジウ蔣敬キヤウキヤウが陸祥リクシヤウ張德チヤウタクを刺ウりて。五百兩イハヤヒの銀子ギンシを失ウひし時トキ。楊春ヤウシュン料リヤウと蔣敬キヤウキヤウは再會サイカイす。張德チヤウタクの妻メケと陸祥リクシヤウを破殺ウツす。

件ケンの銀子ギンシと復フりしあり。第十ダイジウ蔣敬キヤウキヤウが病シヤメで。雙峰シヤウフウ廟ミヤウに宿ヤクを求モトめし。時トキ。三虎サンコの惡棍アククワン。竺天立チヤウテンリツも。搦捕ナツツせり。楊春ヤウシュンも。惡棍アククワンも。搦捕ナツツせり。竟キ蔣敬キヤウキヤウを救クひし。第七ダイシチ黃信ワウシンが疑似ギンイの罪案ズイアンを受ウて。牛都監ウシトクワンを搦捕ナツツせり。囚車クワシヤに乗ノせりて。來キ廷テイ王ワンも。孫立ソンリツ。扈成コウセイ。阮ニヤウ小コと俱ト。五百人イハヤヒの嘍囉ロラを領リヤウて。去キ向キヤウは埋伏マイフツし。牛都監ウシトクワンを數千スウゼン走ソウす。黃信ワウシンを救クひし。是コノ前マヘ傳デンふ。燕順エンジュンも。宋江ソウカウと。花栄カエイを救クひし。舊稿キウコウ。第十ダイジウ柴進シヤイジンは高原コウゲンを搦捕ナツツせり。滄州ソウシウの牢内ラウナイは在アり。李リ心シンも。これを知チる。柴進シヤイジンを救クひし。滄州ソウシウ城シラカを攻ツめし。高コウ源ゲン則ノク節セツ。牢子ラウシは分付ワキケす。柴進シヤイジンを殺コロせし。時トキ。節級セツキヤク士シ呂子リョシと。柴進シヤイジンを憐アハれし。その夜ヨ。件ケンの牢子ラウシも。蒙汗茶モウカンチャを飲ノく。昏倒コンタウさせり。柴進シヤイジンを救クひし。先唐センタウ牛見ウシミが家ケを火ヒにせり。後ノチ。李心リシンは逸イツとす。其コノ時トキ。

段ハどうも直さず。前傳の故能心二。その趣を見よ。第廿二回、盧俊徳の妻
莫氏一。その女見と共。金管一。合二。燕青一。二十の銀子二。辛一。
救ひ出一。第廿四回、関勝が劉豫を諫め、獄二。既一。斬二。劉豫を救ひ
つ一。燕青金の使一。金二。木一。照二。劉豫を救ひ
関勝と其の家眷を救一。飲馬川へ遣二。第廿五回、呼延鈺、徐晟が
金管一。混二。宋安平一。名二。三人俱一。脱二。
考一。便二。自一。救二。第廿八回、宋清夫婦と。朱全一。金管二。捕一。籠二。
時一。燕青が計一。曾世雄二。殺一。其の兵を御道二。好漢一。察二。
入一。牛都監二。敷一。捕二。宋清、朱全一。救二。第廿九回、呂小姐の百足虫一。救二。
畧一。呼延鈺、徐晟等二。百足虫一。砍二。呂小姐一。救二。第卅
雷婆一。其の姪の光棍二。錢一。嘴二。嘴一。の家二。役使一。朱全二。楊林等一。

錢一。嘴二。嘴一。の妻二。毒一。斫二。雷婆一。と救二。第卅一回、内財物一。
部一。四十回の内二。二十九回一。人の危難二。救一。と十六番二。就中一。秦
と復一。二番二。危一。成二。蔣一。又二。蒙汗茶一。用二。三番一。就中二。秦
花一。二二。王宣慰一。の樓上二。箒一。逼二。迫一。為二。体一。前傳
林冲の妻一。高衙内二。逼一。迫二。故一。能二。又一。黄信二。囚車一。孫立
来一。走二。玉一。救二。前傳一。燕二。順一。宋江二。花一。榮二。救一。故二。能一。出二。の
ゆ一。上二。又一。柴進二。滄州牢一。の一回二。人一。も二。前傳一。の趣二。
ゆ一。高源二。兄一。高二。廉一。の如二。幻術一。と二。吉一。字二。の
幫助一。の増補二。の文一。後傳二。の作者一。の如二。故意一。前傳二。の舊稿一。と
摸擬一。看官二。愛敬一。と二。為一。多二。人一。の厄難二。を救一。
る一。前傳二。より一。見二。中一。林冲二。と盧俊義一。の二。趣一。粗

相似たり。然るに後傳は。故意似つり。綴り略し。宋江が小教鬼山を記す。禍ありを焼直し。李俊が常例の元宵燈を觀し。禍ありをこれめ。いかに此のふあは。李俊人々ふ似り。いかに。世に妙他の舊類と。剽竊と。落取んと。欲けり。當今此の間も。あは。換骨奪胎の工緻多し。及。新奇の趣。同。出来ぬ。や。此の作者の才。前傳の舊稿。の。做ひ。いかに。蔡天が新評。その。言。封市助。曲筆。され。甘心。知。僻言。評二十五

飲馬川登雲山の好漢。家眷從類。三十五百の兵と。俱。大洋。衆。浮り。各。船。金。教。鬼。嶋。を。り。五。六。日。り。思。夜。方。位。を。と。り。失。ひ。日本。國。薩。麻。州。の。岸。近。く。す。ぬ。和。人。船。内。の。財。物。を。利。せ。んと。許。多。の。小。船。を。兼。走。推。取。竜。と。敷。んと。せ。り。李。應。燕。青。來。廷

玉子の衆好漢。運り。防げ。物。も。せ。凌。振。大。砲。を。連。放。ち。和。人。の。小。船。を。蒸。籠。粉。を。ま。せ。和。人。の。内。中。は。通。事。あ。り。身。方。と。り。恐。れ。事。の。情。を。問。さ。和。人。の。内。中。は。通。事。あ。り。則。意。趣。を。報。李。應。あ。り。一。千。の。和。人。を。細。段。五。百。疋。棉。布。五。百。疋。を。分。賞。し。又。通。事。も。細。段。四。疋。棉。布。四。疋。と。引。出。物。を。日。本。船。を。退。せ。纜。を。事。と。救。正。し。清。水。澳。に。到。り。と。段。は。薩。麻。の。海。岸。より。一。日。り。清。水。澳。に。着。岸。せ。と。あ。り。あ。ま。り。を。や。の。日。本。人。の。乱。妨。の。為。体。に。明。の。時。日。本。より。唐。山。の。海。濱。近。に。州。縣。の。船。を。乱。妨。さ。る。あ。れ。か。る。物。を。後。回。日。本。より。関。白。と。大。將。を。薩。頭。院。の。援。兵。と。し。伏。線。を。設。け。天。朝。邊。境。の。細。民。ま。も。武。勇。の。外。國。勝。れ。る。隱。れ。る。李。應。等。三。十。五。百。の。兵

推と取りとるは。千疋の細段棉布を贈り。和鮮をねらふは
便是。皇國人の武勇。誣るるあり。評二十六

第三十一回以下。暹羅國の事を写したる中。暹羅王馬賓真ハ
漢の伏波將軍馬援の後裔なり。王妃蒯氏之父。宋の叅知政
事なり。章惇丞相は陷害せられ。儋州に安置の後。逃れて暹羅
に至る。女児を馬賓真の妻とせしむ。第二回。後玉芝公主と
あり。花逢春は妻あり。死。亦虫種は嫌ひあらば。明人の夷狄
懲る。胡元は唐山の服色を改め。かゝる筆をみよ。云々と写し。今の
清主ハ。韃種部落より。又服色を改め。頭毛を剃せられ。いかに
せよ。彼の人。今も明の世をくく。猜する。國王遊山の
段。明板の原本ハ。萬壽山宗廟の但見あり。重訂本ハ。削きたる。

佳句を採る。蔡昊の音心。慙はすもあらん。上もいさ如。古書と決。筆
削や。いさぬる。國主三眞の時。故帛林化の火に死す。國主の肩は
落りて。衣龍の袍を焦く。又道士徐神公羽は遇着し。出家の功德を
説く。四句の偈語あり。後來の凶兆を示し。みよ。後回の伏線
あり。老ある。知。この段重訂本ハ。多く文を易く。かゝる暹羅の丞相
共濤ハ。年來逆謀あり。御向ハ。男臣吞珪。小憚り。果を吞珪の死
後。又駙馬花逢春。宋の大將軍李俊は憚り。あつ。天竺より來ると
す。西僧菩薩頭陀は遇着し。その羽翼とけ。府内は當り。腹心と頼
む。日と母は厚く。管待を段。共濤ハ。玉芝公主の色は愛想を焦く。云々
とあり。條下の細評ハ。奸人做壞事。多は是。從財色上來。共濤謀篡
還未起頭。就先相着。玉芝公主。寫得極像といへ。共濤も十

六七の女見あれば年歳既小四五十なり。此を逆謀の時。色欲を先く
る。其の間の淨瑠璃本あり。薩頭陀亦共濤の女見を掛想。後竟
本意を遂れども。他は出家人のゆゑに。色中の餓鬼。共濤とハ格別
べ。評三十七

薩頭陀ハ幼術あり。又烏藥を共濤に薦め。他が慾を充ち。後ハ困
主と毒殺の伏線。又共濤が薩頭陀。困主太子。李俊花逢春と
呪ふ段。用一木人長六寸三分。取本人年甲。安在木人腹
内。把七隻綉花針。將木人的七穴。釘住。毎日清晨。燒
一道符。晚上奠羹飯。再持秘咒。若是平人。七日必死。若是
福厚貴重之人。亦要三七也。必要死とあるハ。其の間の雜劇
豪人形とよめる。似る。其の魔鬼厭鬼法。只七歳の太子の死。困

且当作但
是筆工
寫無疑

主と李俊花逢春ハ恙なき。是福厚。貴重なる故。然も。蔡是が評。及之
如。太子を殺。困主の統を絶。李俊を王とせ。又蔡是が總評。
厭勝之術。從來有之。且無論書傳所載。本朝康熙年間。吾邑
前有命道婆。後有錢道婆。俱行此術。俗名并樟神。其術取
樟木刻為人形。約三寸餘。取人家小兒。聽俊者。空糶得。其年
甲書符納于木人腹中。用符咒并祭七日。其見即死。薛子前
後俱為太守所斂。予曾親見其案牘。此處寫薩頭陀厭鬼法。不
為荒唐証也。といふ。其の間の雜劇。調伏の豪
人形。必是本據あり。評三十八

薩頭陀が厭鬼法。李俊の年甲の知。其死を共濤ハ病。其の
年。李俊ハ四十歳の賀々延を聞。く。これハ年甲の知れり。

共濤^{ミナト}の^{ミナト}逆の後、いづ程もろく位と正さんとせし時、大臣はみな参賀せむ。共濤怒て不参の大臣五十餘名と殺しとある。蔡昌^{サイチャウ}を評よしとある。此を李俊^{リジュン}が任する。とある。とある。衆兄弟を任用の障りあるをいふ。其の作^{サシ}作^{サシ}做^{サシ}とある。これらも初より暹羅の大臣の姓名を一人づつある。刺^{サシ}大家とある。逆臣の爲に屠られし。あゝいふともちもいふ。その中五六人、精忠ののあり。共濤と戦ひて薩頭^{サツトウ}陀^ダの幻術あり。それらも勢れうといひ。今世に趣あり。又共濤を薩頭陀と俱ふ。後宮は入んとせり。陡昏倒せり。怖れくゆては後宮へ入んと欲せむ。此の故は國母も公主も。兼後宮も存る。恙なく。といふ。何故もろくぞ知る。國母も公主も。逆臣は汚れを。後宮を脱れせり。片山里^{カタヤマ}のまのをも。夏^{ナツ}の障りあり。且あれも物もいふ。来^キへ。只李俊^{リジュン}の之と。の之宗と。あ餘のものと者んと。いふ。凡情も。作^{サシ}。評^{ヒヤク}四十一

國主^{クニノミ}殺^{コロ}されし後、蕭妃^{セウヒ}玉芝^{タマシ}公主の夢をええ。後來のものと告げ段^{ダン}は我不^{ワガ}聽^ク良^ラ言^{コト}。誤^{アヤマ}遭^{ウチ}毒^{ドク}手^テ。今^{イマ}隨^ツ丹霞^{ニシキ}師^シ父^フ出^デ家^カ倒^タ也^ヤ。道^{ミチ}遙^{トホ}自在^{ジザイ}とある。條下の細評^{サイヒョウ}。做^{サシ}鬼^キ出家^{チカ}。千古^{チウコ}奇事^{キジ}。といふ。嗤^シ得^{トク}くといふ。國主又^{マタ}宮中^{キウチュウ}有^{アル}金甲^{キンカウ}神^シ人^{ジン}守^モ住^{ジュ}。賊^{ソク}臣^シ不^フ敢^{カン}進^{シン}來^{ライ}。你^ニ母子^{コノミコ}且^カ自^ミ實^ミ心^{シン}。といふ。もろく。金甲の神人常^{トコ}宮中^{キウチュウ}と守^モる。灵驗^{レイケン}あり。何ぞ太子の厭鬼^{イエンキ}死^シせしと救^スざる。何ぞ國主の毒殺^{ドクシ}せられしと救^スざる。此の金甲神^{キンカウシ}。國主と太子と見殺^{ミコロ}せり。國母と公主とを守^モらんとす。故^ユういふ。あゝいふ。そのまゝと字^ジ。作^{サシ}。作^{サシ}。國母と公主とを舊^{モト}の^{モト}。宮中^{キウチュウ}は措^サん爲^ニられ。作^{サシ}。作^{サシ}。理^リ。形^{カタルシク}。花^{ハナ}逢^{トキ}春^{ハル}。日^ヒ進^{シン}。維^イ。中^{チュウ}途^ト。船^{フネ}中^{ナカ}。共濤^{ミナト}の^{ミナト}。逆^{サカシ}の^{ミナト}。を^{ミナト}。知^チ。敬^{ケイ}。馬^{ウマ}。見^ミ。哀^{アハレ}。

高青倪雲と俱に金敷鬼嶋に立之。李俊は報て復讐言の大義を謀る。李俊則金敷鬼嶋を敷く出く。共濤を攻る。薩頭陀を遣ふ。且妖術あり。加之草鵬兄弟三人。萬夫不當の勇ありて。五千の苗兵を戦へり。李俊は屢敗ぬ。明珠嶋退却時。又頭陀は火攻せしむ。無死とて折る。暴雨忽然と降る。料を必死を脱れり。便是三困志演義多。司馬仲達父子。胡蘆盧谷の剽穴竊摸擬ん。介標李俊は辛く。金敷嶋は退却し。薩頭陀草鵬兄弟進み。これを攻敷る段。李俊は頭陀の幻術を折ん。準備す。汚穢の物の別船に在る。用ひしやう。李俊は戦船利を考ふ。又退却し。城を守り。此の時童威高青等四人の戦船敗走。城は入ると克ん。進羅城の空虚ると龍を。三百名の残兵を領て。進羅に到る。共濤草鵬等用心警戒せしが。城を攻捕る。此の時高青月ハ

守城の百姓。和合見が内志ふ。獨志のひ入る。城を焼んと謀る。草鵬が由あり。も巡る。高青は遂に宮中へ到る。因母公主を見参る。李俊が国主の爲に義兵を起す。花逢春と共俱に薩頭陀と戦ふ。と告ま。是より宮中へ面。再計較を作とあり。進羅城を守り共濤が。後宮とハ胡越の。高青は志の。教還面を。那金甲神の擁護を。今此の間合巻草紙の趣向は似る。この時李俊乘廷玉を海歟船。清水澳に着る。地を守る李俊が将官。瘦臉熊狄成を迎へ。進羅國の逆丸并は李俊が戦ひ難。金のと告せ。金敷鬼嶋へ法進の後。李俊は白衣好漢。金敷鬼嶋に到る。李俊は樂和は對面。迭は往時の胸臆を叙る。皆ある。評する。及。先。公孫勝薩頭陀の幻術を破る。衆

好漢李俊と俱に暹羅に攻ると。共濤怖れ計と頭陀に向ふ。薩頭陀
の機を棄て共濤の女児と妻とをこの時高青宮中より夜分は
挙て暗誦と。城遂に破れ李俊花逢春等共濤并に家口十
餘人を誅戮し宮中より到り国母公主と慰問し又草鷗を殺し薩頭
頭陀に逃亡し往方と知らず。是より先草鷗は来廷玉を殺れり。獨草
鷗は薩頭陀の指揮より日本國に赴けり。兵を借んと。東海へ去り
頭陀敗れ金鷲嶋より暹羅へこの鋒を免れり。かく樊瑞樂和燕
青徐日成等各處を査訪し薩頭陀を合んと欲せ。第三日は鎮海
寺に到り塔下は高嶺を薩頭陀にいぬ比あり。共濤の女児を推して塔
の頂上第一層に躲れてを共濤の女児頭陀を怨む。戒力を塔下は落
し頭陀を搦捕せりと云々と訶てその身も共は縛縛らる。この段の本文

原來薩頭陀雖會伏法却不曾騰雲とあり。この間の俗より外
口状に頭陀飛騰の術あり。躲れて塔上は在るへをも。それなり。わけてはあま
脆く共濤頭陀の才知るより。他より。新奇の趣向もあへ。總て
あへ。趣向も。味薄く。さて。三十三回三十四回。重訂本。文と
見ると。殊特。多れ。夏。の。同。い。れ。異。同。を。正。と。及。び。頭。陀。共。濤。伏
誅。後。李。俊。等。國。主。の。大。喪。を。執。行。し。禮。を。あ。ち。國。母。李。俊。等。の。衆
好。漢。を。召。取。り。國。位。の。事。を。談。せ。り。李。俊。は。花。野。馬。を。讓。り。花。逢。春。并。は
衆。好。漢。ハ。李。俊。を。推。し。國。位。を。踐。め。し。古。又。や。定。り。大。家。退。散。を。ま。り
れ。も。李。俊。ハ。正。位。に。即。り。元。帥。府。に。在。り。國。事。を。行。ふ。作者。の。あ。る
國。體。を。張。ん。と。欲。す。故。に。李。俊。を。速。に。王。に。す。後。宋。の。冊。封。を。受。て。真。主。を。是。と。爲。す。試。み。此
間。の。戲。作者。の。理。義。を。見。る。今。も。昔。も。あ。り。や。看。官。の。意。を。

めく。字と不字と分別せ。巧拙と知る捷徑とるべし。評四十二

共清薩頭陀鼻鼻首せし時。共清の女見し斬らるべし。徐成が請ふやあるは清

獄敷れらる。おは後大赦の時。郭哥の妻をせんをり徐成が。酒の酒店で。郭哥の妻と

取らせんと約束せりあるは。これも亦前傳。宋江が一丈青と。王矮虎の妻と

前約を果せ。舊稿へ。郭哥のふり。そのあやもあはれ。その武松のふり。評

中。具ふま。李俊の棋位居る。衆將官の職官位位置と定めり。第一柴

進。第二孫勝。以下略。この條。原本の敷頭評。官制。参用列代通俗

演義とあり。又西洋記。具ふハ書名。三寶太監西洋記通俗演義と

ハ。通俗とあり。明より。よハ所見を。このうらうの俗稱るべし。評四十三

草鵬。日本の兵を借る。このうらう段。日本國在大海島中。綿。一旦敷

千里。官轄十二州。多出金銀珍異之物。其人雖好詩書古玩。

却テ貪リ詐好殺。又名倭國十二州共十萬兵。虎踞海外と見

えり。この十二州ハ。薩摩十二嶋を云歟。ゆゑハ。筑前筑後肥前肥

後。豊前豊後日向大隅壹岐薩摩。周防長門の十二州を云歟。

このうらう。又云。日本國乃秦始皇時。徐福到海中。取長生不

老之藥。帶有童男童女百工技藝。醜巫卜筮。有數千人。

因始皇日恭虛。徐福避地于此。開創起来。と云。唐山より普

通の謬説る。辨るも足る。清に至る。才よの証証と知

る。又云。重訂本ハ。この五十三言と削去る。これら。蔡日。本勝る。

又云。原來関白。是日本大將的官號。取每事都要関白。他的意

思。不是姓名。那関白身長八尺。勇力過人。領和玉。今点薩摩大

隅二州之兵。共是一萬。戰船三百。祭旗用洋。よま。関白ハ。豊

足利義満の時。南越國より白象を貢獻するありしを傳せて
の如く作られたる。抑明清の稗史も。往々皇國人の船を擄
せり。吳楚州縣を擾乱せし。鹿臺を築くやと作り設けり。愉快の
事とせしむ。昔南北朝の内乱も。竟に戦國より比。鎮西の浮流人。勇悍
多し。吳楚の間を起りて。乱妨甚しうければ。足利義満の時。明
朝より。乱妨人を制するべし。といひおつた。あるあり。是より以來。近
世濃関の落人。に至るまで。唐山の海岸は推せり。人民を屠り
財貨を去家奪せり。既は歲月を累して。甚しう。稗史は和
兵を慶まざるや。と傳へり。其の憤りを洩せり。清の逸田叟が女仙外
史も。和兵侵犯の爲体と字す。唐賽児が麻毛下の女仙の。和兵は
輪毬せり。遂に死に至りし。并に和兵を剿滅せり。と作り設

るは。亦是和乱の時の恥と雪り。憤りとも。はるんかの年来の乱妨。皆是
落人浮浪人等の所爲なり。且外國へ推流するものあり。却て皇國に
て。是を知り。故に書傳を載せり。めをいれども。和乱の爲体は。明史は詳し
く。及えり。其餘五雜俎以下の小説も。多く和乱の事を載れり。彼の書
策をえり。は。あつんと想像するの。只此の後傳と女仙外史の。こ。あつと。
唐山の稗史。作の趣を撮合し。作設けり。もの。是。所見あり。り。ど。
亡れ。れ。書名を挙げ。れ。お。の。ろ。と。れ。各。と。死。は。の。情。を。の。づ。亮。然。る。べ。し。
書。成。于。憤。と。い。ひ。か。る。る。や。あ。る。へ。ん。一。笑。十。笑。評。四。四。
され。先。主。目。電。嶋。の。鐵。四。維。漢。并。屠。崆。余。漏。の。嶋。長。ハ。草。鵬。ヲ。戰。没。し。を。
傳。せ。り。今。夜。ハ。先。安。息。し。て。翌。南。門。を。攻。ん。と。酒。を。取。り。痛。飲。し。て。醉。臥。
し。る。折。関。勝。等。は。夜。討。せ。り。て。逃。る。本。嶋。は。回。り。し。ら。ふ。を。草。鵬。死。し。と。

功と成さず。身方の不利とぞ。用心は台々。酒を飲み酔臥し。立足も
敗北せり。理の多度死所。是より下第三十六回ハ。李俊が諸大将と分ち遣
し。青電屠崆余漏の三嶋長と征伐せり。段を。ちせり奇計るれば。
評事及ぼし。その中ハ。宋廷玉。扈成の鐵羅漢と討滅し。時。士卒毒
水と飲み死なるとせり。安道全誨へ。甘草湯を。毒を解浮せり。
あ。三嶋長は。谷の洞内ハ逃。竜。み。似。趣。鐵羅漢ハ宋廷玉
焼殺されり。又朱全。黃信。穆春ハ。釣魚嶋ハ余漏天と。剿滅し。つ
段の土産物ハ。巴豕と。大蛇。肉。美。神益。延壽の茶と。也。
世條の細評。ハ。釣魚陪襯。と。他の土産。多。作。言。又関勝。
楊林。童猛。屠崆と討滅し。段ハ。嶋長石洞中ハ。閉。竜。攻。方
と。屠崆ハ。愛妾。秀姑と。美婦あり。父ハ。揚州の人。方

明と喚ばる。揚林料ら。此の方明の。引。俱。洞内ハ。入。と。
且秀姑ハ。資。屠崆ハ。酒。酔臥。時。首と捕。出。
関勝ハ。報。屠崆の妻。并。類。剿滅。此の方明。父。女。
揚州の人。後ハ。秀姑ハ。楊林の妻。見。秀姑ハ。御。屠
崆ハ。掠。遂。側室。嘗。詭。虫。種。
之垢の婦人。揚林の功德。威。取。今。素。生。
拘。喜。鉾。又
後回ハ。諸將官の妻を取。段ハ。再。虫。嫌。宋。國。の。女。人。
足。故。作者の用心。後。評。四。五。
第三十七回。徐神翁題詩の一事。前。回。暹。四。維。王。春。遊。の。照。對。之。牡。牝。
灘。李。俊。等。高。宗。の。駕。を。救。一。事。李。俊。既。王。位。を。踐。と。い。い。ま。す。

有年云。第四十六評中。赤裸鳴の石と。ベラリ云。此鳥素の。敷金銀銅鉄管中。其の
衣裳冠當。女草葉を毎々禪を穿。是も有本あり。されば親子兄弟大属嶋
婦の別は自は。家柄本の極品の貴。玉州葉とて。好む。又垂れて。種障。虎。常宗因
茅の類と食。日本。の里菜と大同小異。味を美。二年ベラリ。在。昏。姻。の。来。て。見。有。金
と云。君の故。自言。諸。通。す。如。く。別。所。終。は。其。從。神。連。の。目。在。鍋。ひ。て。芋。を
煮。ると。持。寄。て。あ。や。や。頃。の。計。て。歡。興。す。は。ぬ。か。し。も。恣。祭。又。同。一。頃。の。道
暹羅より二三年一度。船来。銀小刀を質。海鼠。交。質。す。海鼠。を。射。て。取。り。流
鳴の情態。思。や。ら。る。其。後。福建。の。届。る。の。時。某。寺。の。詩。短。答。話。の。事。を。許。れ。寺。に。雜。劇
興行す。丙戌八月。長崎。の。届。る。の。日。有。司。の。種。の。尋。問。の。事。あり。ベラリ云。鳴。名。更。は。不。知。
但。蛮。夷。の。属。嶋。故。清。國。の。不。知。や。も。答。り。又。福建。某。寺。の。平。常。雜。劇。あり。是。は。漂。客。齋
散。の。為。に。催。る。事。に。答。り。此。事。清。人。並。通。事。等。連。印。の。上。書。と。故。有。て。密。に。見。る。事。あり。
を以て。暗記の俣を寫して。蛇足を添。ハ此評のりつゝの事あり。鳴名未詳とある因て。

ら。れて。丙戌。年。秋。八。月。長。崎。に。届。れ。り。の。同。七。人。年。と。歴。て。五。人。は。死。し。七。人。帰
朝。也。その。暹。羅。より。清。の。福。建。に。到。る。海。上。の。日。子。本。傳。は。作。妙。速。急
る。も。あ。り。又。長。崎。より。暹。羅。へ。到。る。水。行。の。里。數。ハ。天竺。德。兵。衛。記。に。凡
そ。う。も。亦。本。傳。の。他。の。如。く。速。急。る。の。も。あ。り。本。傳。ハ。薩。摩。澳。より
暹。羅。の。属。嶋。清。水。澳。へ。纒。み。兩。日。少。く。到。り。し。と。り。似。物。語。ハ。か。る。り
多。れ。ども。就。中。本。傳。ハ。暹。羅。を。り。宋。の。附。庸。と。す。の。故。も。金。敷。鬼。山。を
金。敷。鬼。嶋。と。作。り。更。に。その。往。還。を。近。く。し。り。作。者。の。い。ろ。外。夷。を。厭。へ。ど。
宋。と。暹。羅。と。遠。く。也。彼。此。一。世。界。と。云。る。評。四。十。六
李俊。暹。羅。を。一。統。し。ゆ。び。金。敷。鬼。嶋。に。到。る。時。は。道。士。徐。神。翁。酒。宴。の
席。上。に。來。臨。し。詩。を。賦。し。仙。術。を。あ。り。し。を。為。体。三。國。の。時。の。左。慈。に。似
た。の。こ。を。趣。み。李。俊。詔。の。官。と。俱。は。牡。蠣。灘。に。到。り。金。兵。と。討。退。け。

宋の天子は一介の功績なきの故に牡蠣灘の故事を撮合し忠義の
勲烈を金とて遂に冊封の正位を明かりし局と結ぶ。原来暹羅の属嶋は
金敷鬼嶋と喚ばる。蔡旻が第三十七回の評に云。按別傳高宗因
金兵陷臨安遂航海移温台舟淺于牡蠣灘灘之上有金
敷鬼山山上有金敷鬼閣閣上有徐神翁詩與在潛邸所得道
士詩合即本傳所載之詩也。金敷鬼乃山谷閣名非嶋名在口
州府境内亦不属暹羅本傳乃借用耳。この評精細なり。事
實を辨るに足る。本傳に録する暹羅の属嶋二十四嶋も虚実
相半なり。且暹羅より唐山へ往還の道速るハ作者筆力を省ん為る
べし。如庚辰年陸奥州伊用郡磯嶋村の清吉が十二人赤裸嶋に漂流し
赤裸嶋より暹羅に到り暹羅より清國福建に到り福建より護送せ

られて丙戌年秋八月長崎に届れり。その間七年と歴て五人は死し七人帰
朝也。その暹羅より清の福建に到る海上の日子本傳は作らぬ。速る
るもあらず。又長崎より暹羅へ到る水行の里數ハ天竺徳兵衛記に見
えり。是も亦本傳は他が如く速るるのみあらず。本傳ハ薩摩の澳より
暹羅の属嶋清水澳へ繞る兩日と到りしとあり。此物語ハかゝる
多し。就中本傳は暹羅より宋の附庸とす。この故に金敷鬼山を
金敷鬼嶋と作り更なる。その往還を近くする。作者のいふ外夷を厭へど
宋と暹羅と遠くを。彼此一世界とある。評四十六
李俊暹羅を一統しゆく。ゆゑに金敷鬼嶋に到る。時道士徐神翁酒宴の
席上より來臨し詩を賦し仙術をあらはす。その為体三國の時の左慈に似
たること。李俊詔の官と俱に牡蠣灘に到る。金兵を討退け

本傳は武松と再會の文免の送懐之時鄆哥ハ徐晟の從者となり。俱に臨
安ふまゝ武松は對面し武大金蓮の舊話及びいふ看官の感深
くは武松も鄆哥も武松は後ひく出家得度し。暹羅よかへむを
わが他江忠の食客より。蒙汗毒をもち。旅客を引引せし罪障消
滅のよみくふちり。共濤の女見を取ち勝はへ。かの共濤の女見ハ薩頭陀を
恨むより。空糶は燕青樂和等。頭陀が塔上は隠れを我知せる。その
功ありしゆも。ちり共濤が國主と弑逆の時。一言親を諫めるとし
ち。その後父の命より。頭陀の妻より及て。又推辞するもあはれ。かく父
共濤が伏誅の後。頭陀をみく。搦捕せしも亦不義。はつと徐晟が
鄆哥の爲は前約とく。共濤の女見の命乞て。鄆哥は妻せしむ。就中
耳心より。かれは鄆哥ハ共濤の女見を取ち。武行者の從弟ははる月一

段の光輝を増す。前傳の照對は。その宜しきとせり。又この時。燕青柴進樂
和蕭讓徐晟等。李獅々を訪ひ。是も一事も漏れしとらき。亦是前傳の末
局をいふ。文武八員の官人。昔日の柴進燕青と異へ。國更はより。天子の
勅命を候ふ。才は大役を帯り。西湖を遊覽するも。謹慎は疎る。舊伎
李獅々と相會し。忌憚るとり。いふや。李獅々の燕青柴進は。再
會するのよし。又を終る所詳る。この段をいふ。あはれ。他があはれ
べ。かくて燕青柴進等。風流の餓鬼。當今の人柄に似る。評四十八
暹羅の君臣。冊立封拜の勅使より。宿大尉渡海の時。柴進等。文武八員
御導より。その勅使は宿大尉にせり。亦是前傳の末局。宿大尉は。是より
先。安道全が汴京を亡命の時。又聞煥章。焦面鬼の誣訴といふと。と
汴京小到り。皆の庇覆を仰ぐ。一部の斃死す。看官は送れさせ

よの為にまゝ宿大尉の。宋江等と愛顧する。始あり終あり。此の人多しある
へくぞ。又暹羅の君臣婚礼の段に至る。聞煥章の女見。李俊の妃は
撰配せられ。呼延灼の女見。徐成は妻せられ。呂小姐は。呼延鉦小妻せられ。蕭讓の
女見。宋女子嫁。盧俊徳の女見。燕喜月は正配せられ。元六の嫁娶の一段は。りりして
くく。これ。看官飽く。地へ。李俊。聞小姐と娶り。後。故の暹羅王の妃蕭氏は
宮中へ。避け。駙馬府に在り。蕭妃極く賢明。婦徳あり。始り。一夏も取
疵を見ず。然るに李俊は花駙馬に譲り。みづ。國主ならん。是に。歎然とす。所へ
又楊林。方明の女見。秀姑と娶り。樂和。宮岷。吳永仙と娶り。し。唐山の
女見。これ。いもあま。沙龍。外妻。う。兩個の。虫女と。妻。つ。い。う。う。う
也。関勝。呼延灼。数人。家眷あり。本傳は。関勝。子。と。我。也。関勝は
関羽の後衣。向。と。看官の。具。負。餘の。好漢。う。格。別。へ。う。と。子。死。を。送

憾多し。正史の。隨。関勝。劉。豫。害。せ。れ。る。子。関。某。あり。武。勇。方
略。父。也。徐。成。呼。延。鉦。を。ひ。り。後。暹。羅。に。到。る。と。あ。り。関。勝。が。子
恙。多。し。却。駙。の。多。う。看。官。愛。さ。る。獨。関。勝。の。形。も。林。冲。晁。蓋
盧。俊。義。し。必。後。あ。る。の。晁。蓋。盧。俊。義。梁。山。泊。に。到。る。の。後。家。眷
あ。る。の。ゆ。え。も。そ。の。妾。腹。の。子。を。ふ。せ。他。が。い。う。も。あ。べ。林。冲。の。妻。の。張。氏
憂。死。す。又。娶。は。れ。子。の。あ。る。死。う。は。れ。も。此。を。猪。園。に。見。え。る。鬼。生。朝。奉。の。故
事。と。撮。合。し。林。冲。孟。州。へ。刺。配。せ。れ。時。の。妻。懷。妊。二。月。及。り。い。ま。分
娩。せ。り。憂。死。せ。り。家。中。の。七。骸。う。男。子。出。生。す。張。教。頭。の。高。休。又。知
ら。れ。ん。と。怕。れ。他。御。の。親。族。許。遣。し。美。食。せ。り。成。長。し。林。某。と。喚
ば。れ。る。作。り。看。官。の。感。深。く。一。百。八。人。中。の。林。冲。ハ。特。に。可。愛。死
好。漢。へ。は。れ。ど。い。も。多。林。冲。ハ。子。あ。り。う。作。り。前。傳。は。干。ら。ぬ。星。外。の

とく一事も漏さず。用心精細なり。修れども。李俊が暹羅と一統し
る。後の物語一卷。第十卷。四回あり。これを世間の俗にタシんとし。嫌ふ
カレトハ。文勢脱々。餘夏の長死は倦義。共清菩薩頭陀滅亡
し。後ハ。一二回少く。多局と結ぶを妙とも。わくのどけは実ヲタシト
へ。これども。前傳の送まると拮捨し。一人一事も漏さず。本傳に至て
初出せの人物の列傳し亦精細なり。大放ちぬ。陳考の文を。唐の
作者ハ。多くゆりて細筆し。一部の趣向ハ。上ハ評ヤリ。瑕疵
あり。予もこれ品深し。是中一平の作。てい。ま。上。カ。被。け。易
く。これども。水滸の後傳は。十二分の愛敬あり。し。も。看官
これを喜ばる。り。れ。多。く。評。五。十。
結局數行の文内。新舊二本。多く異同あり。原本ハ。國主後至七

句傳位世子也。到丹雫宮。修道。壽至八十。無疾而終。
衆公卿。盡高年。唯有公孫勝。至一百二十歲。尸解。とあり。
又重訂本ハ。國主政務之後。傳位世子也。云云。國主李
俊。直活到一百二十歲。無疾而終。とあり。公孫勝ハ。却八十餘歲。
尸解。李俊の壽一百二十歲。は作るものハ。その天壽星。とれ。評五
王進ハ。前傳ハ。是最初出世の好漢。且高休と對頭と做し。も
他を最初とす。然るを前傳ハ。その終る所と詳みせば。作者の腹内を推
量する。忘れし。前傳ハ。高休が之を。忘るるを。本意とす。
其の故。最初の敵も。王進も亦恙あり。其の終る所と隱し。具
ヤ。百八人の好漢。皆綽號する。王進の之。綽號する。ハ
那。百八人と。一列をぬを。明。後傳ハ。王進の。増補とす。先

俗を免れらるものか。百二十歳なり。尸解せんとハハと云く。評五十三

恭日天分總評 首卷、第二十五則、小。後傳の文法を評解し、何の法、れ

かの法と云ふ。前傳は、金瑤の文法を評解する。餘述を詰まる。大約

釋説と為る。文の法則ある説を。況その名目と云く。人は誨へるのふあ

を。文は臨み千変萬化。蓮の糸を引く如く。只その作者の才は任らく自然の

妙文のそまある。後人その法則を守り、よく作らんと欲するも、必死の

うらまれの辨論。と云くその文を神なり。曲学多。後生を惑えんとす。所為ん

第三十四回の總評也。大小數段の文法を評解する。是亦作者の求めて

一回の數段を作為するあり。覺ゆる熱かひ自然の然るもの。文の法

則よりまれば。是道之量の釋説を勉めんや。必しも信をへん。評五十四

前傳より百八人皆綽蹄あり。後傳より新なるもの。外は綽蹄あるを

し。れも亦前傳の作者の用意はたぐひ。按する。周密が癸辛雜識に載る

龔聖與。作宋江三十六贊。序曰。余嘗以宋江之所為。雖不得自

齒。然其識性超卓。有過人者。立號既不僭。後名稱儼然。猶循

軌轍。雖託之記載。可也。續集上。及之。宋江等三十六人の綽蹄。是

僭稱せる義。羅貫中水滸傳を為る。及之。地煞七十二人を附増し。亦

綽蹄を肩し。後傳の作者の意を知り。吟也。鉦。徐晟。花逢春。宋

安子の數人。必綽蹄あり。ある。はる。及之。是亦前

傳他者の意と。岩語ある。又按する。右の癸辛雜識を考る

周密の字を公謹といふ。宋末の人。元の國初に至る。當時宋江等

三十六人の像。賡世も出れば。その由來。死を知る。又清の阮葵生が茶

餘客話云。世傳水滸傳三十六人像。亦龔聖高士筆。而明吳

倫見ハ豈の誤ル○立去愈年改號蚤去ハ未の誤ル○金
滕折言約爲故草ト○秦王貶黜尺布詭黜當作黜詭
當作謠○豎儒倡義我欲南遷堅ハ豎豆の誤ル○萬歲歲
○而兩ハ○曰厚澤當作仁厚澤○山比岑天崑崙岑天の
得ル○青苗法行傷國脈鄭俠繪圖忤安石繪ハ繪
固ハ圖の誤ル○原本青苗法行係安石鄭俠繪圖傷國
脈ハ作ると是と也○天中橋上原本作天津橋上爲是○
首倭幸有灑水公倭ハ撿灑ハ灑の誤ル○曰朝榮曰ハ
内の誤リ翰ハ當作翰○元祐來人來ハ豈の誤ル○免成許
識免ハ竟の誤リ許ハ詩の誤ル○識當作識○渡九冊冊ハ
哥の誤ル○二聖環日去地後日且去ハ去地ハ腦の誤ル

○蟻生冒由月○甘心媿膝微臣構其甘媿屈微微構ハ
擯の誤ル○不可移移○侍奏雨宮字莫倫奏ハ奏雨ハ兩字ハ
孝倫ハ倫の誤ル○執山崩維粉ハ執維ハ潰○侍郎侍郎ハ
蜂討ハ鬪蜂ハ蜂○喪陽襄陽襄陽未歇寡ハ寡の誤ル○無計
計ハ寸の誤ル○星亭阜亭亭○執義執執○黃冠黃冠多
維絶此維維の誤ル○叫杜鵑叫叫鵑鵑の誤ル○回首回首
斷知烟○有髮白髮○續萑口編續萑口編
只是一編の題詞中誤馬謖刻のヨククをかくの如し本
文に至てハ今ウ枚舉ハ是ありども原本より校讐言訂正の
キと麻少ありけれ博覽強記英才敏捷の大儒先生と云も孰
ゆくえを讀むべ死唐山ハ是文字の國と云る坊賈の利の爲ハ

恥とも知れずや。仕入物の唐本小。誤字多ク係を常々見せども。
か甚しむハと稀ニ。ひとり嘆息のあり。首卷の数字を抄出た。好
事の癖歟。好夏之癖多。評五七八全

さてこの愚評ハ。只大略で挙ぐるのみ。先を細く評するは。多は数十
頁の紙筆と。費は至るべし。そも亦要らぬ。子なれど。かをうりてはく
やみだ。抑唐山の稗史ハ。必後人の批評あり。皇國の草紙物より

小。今も昔も評せむれ。そをうりて味あり。いと稀多由之
へけ。これを我々の筆をよみも。近世のウラ深の、えく。乃々めち
いとまぐりりへ。

天保二年辛卯夏肆月十九日 著作堂老朽哉此より

水滸後傳國字評追考

鄆哥道伏家甚是得罪。六の整頭評削をへ

愚評ハ伏家ハ俺家の者文をへとソハハ臆説を

怨れるハハ

再掲するハ伏家ハ火家の俗字なり。俗語ハ家伏と

ハハハあれども伏家とハハハ水滸後傳のあり所見あり

新舊二本 火家の火ハ夥と同音あり夥家とハハ同シ
共作伏家

便是仲々同内の人とハハハ水滸傳第五十七回ハ孔亮が

接兵を宋江に求めんとし李立が酒を店にまき梁山泊に到

る路を問ふ故ハ李立道。既是來尋宋頭領我這里

有^レ合例。便^ニ呼^ビ火家快去^トある。火家即^チ是^ルる^レ後
傳^レ信^ニを加え^テ伏家^ノ作り^シ之^ノ鄧哥^ガ伏家^ニ甚^ク是^レ得^ル
罪^ヲと^リひ^ク自^レ分^ノの^レあ^リど^クあ^リ呼^ビ延^ル鉦^徐尉^孝蒙
汗^ヲを^シ飲^ム一^ツも^シ昏^リ倒^レセ^リ仲^ケる^レの^レ為^ニ徐^晟子
陪^ワ話^ス言^ハ兼^テ火家^を伏家^ノ他^リし^テあ^リふ^レ因^ニあ^リふ
之^ヲ愚^ク評^ス蛇^足の^レ辨^を做^シし^テう^レの^レ警^戒除^ハ速^ハ前^ニ去^ル
一^ツ又^チ家^ノ伏^ハ家^具と^シあ^リあ^リ何^レま^レか^レ家^内の^レ雜
具^と家^ノ伏^と字^水滸^傳第^十回^ノ家^火什^物と^シあ^リ是^レ又
金^瓶梅^第二^回武^大が^弟武^松と^シ管^待と^シ段^子金^蓮
云^ク便^ニ呼^ビ迎^見收^拾了^レ碟^盞家^ノ伏^とあ^リも^シ同^根の^レ云^ク

又^チ職^人の^レ道^具も^シ家^ノ伏^と字^水滸^傳第^五十^三回
李^達が^湯陰^子進^退し^テその^レ家^ノ到^ル段^子李^達看^他
屋^裏都^テ是^レ鐵^砧鐵^錘火^爐鉗^鑿家^ノ伏^とあ^リ是^レ又^チ
又^チ雜^具調^度の^レ類^も家^ノ伏^と字^金瓶^梅第^十四^回花
子^虛が^花大^多の^レ嗽^訴せ^テ家^ノ財^を分^散す^レ段^子這^花
大^花三^花四^分了^レ些^レ床^帳家^ノ伏^去了^レと^シあ^リ是^レ又^チ家^ノ
伏^と伏^家と^シ紛^レ易^レれ^ル筆^のつ^レは^レ具^も是^レ後^傳る^レ伏^家
當^レ子^火家^ノ他^レ心^一
朱^金子^子あ^リは^レ後^傳る^レ漏^レ再^評
水^滸傳^第五^十一^回美^髯公^朱金^が吳^用雷^橫の^レ誘^引

老小ハ女房ノ
コトナ尾コニテハ
先婆ト小兒ノ
コトナル也
○放心ハ陶山氏
ノ水滸解ニ譯
シテ安堵ノ義
ト云ヘリ蓋寛
放心也

れく梁山泊に到りて段々朱全道。小第今蒙呼喚
到山滄州知府必然行秘書文書去鄆城縣捉我
先小如之奈何宋江大笑道我教長兄放心コトモ
并令郎已取到這里多日了ナリ。よあは朱全コトモ男兒コトモ
分明之れば第五十五回時遷が徐寧の甲と盗む段の
金瑞が評注の徐寧有子妙前朱全有子所以能推
知知所愛之之心此徐寧有子所以寶惜哉世留
傳之甲也とりはと後傳不徐寧呼延灼の甲の子のありハ
前傳の趣に做ひるや朱全の子の多かりや其の一條
愚評中よ追書まてくやん 辛卯六月七日追識

薩頭院の木偶を造りて呪咀の邪法を以て條乃
追評

この中又似るものあり金瓶梅第十二回金蓮が正門慶
小愛と夫とけしんあし賊暗子に回背の法術を行はる
段に賊害說道既要小人回背用柳木一塊刻兩
个男女人形書着娘子與夫主生辰八字用七七
四十九根紅線扎在一處上用紅紗一片蒙在
男子眼中用艾塞其心用針釘其午下用膠
粘其足暗埋在睡的枕頭内又朱砂畫符
一道燒灰暗攪茶内若得夫主吃了茶

在ハ正文ノ
於字ニ同
ニトヨムヘシ
又字ノ如
アリノ義ニ
云知モ凡
ナリ

到^ラ晚^ニ夕^ニ睡^バ了^バ枕頭^ヲ不^レ過^キ三^ニ日^ヲ自然^ニ有^ル驗^ヲ婦人^道
 這^コ四^ノ椿^ノ見^ル。解云。四椿見。猶云。四箇事也。是^レ恚^ノ的^ノ說^ハ賊^ノ膽^ノ道^好
 教^レ娘子^ヲ得^テ知^ル用^テ紗^ヲ蒙^ル眼^ニ使^シ夫^ヲ主^ト見^ル你^ヲ一^ニ似^キ西^ノ
 施^テ嬌^ニ豔^ニ用^テ艾^ヲ塞^ル心^ヲ使^シ他^ガ心^ヲ愛^メ到^ラ你^ニ用^テ針^ヲ釘^キ手^ニ
 隨^フ你^ノ恚^ノ的^ノ不^レ是^ラ使^シ他^ガ再^レ不^レ敢^テ動^キ手^ヲ打^ツ你^ノ用^テ膠^ヲ粘^ル
 足^ニ者^ハ使^シ他^ガ再^レ不^レ往^テ那^ノ里^ニ胡^ノ行^キ婦^ノ人^ノ听^ク言^ヲ滿^ク心^ヲ
 歡^シ喜^ス當^テ下^ニ備^フ了^バ香^ヲ燭^ヲ紙^ヲ馬^ヲ替^テ婦^ノ人^ノ燈^ヲ了^バ紙^ヲ上^ニ
 九^ノ薩^ノ頭^ノ陀^ノが^レ行^キ所^ノの^レ惡^ノ方^トと^レく^レ相^シ似^スう^レに^レる^ノの^レ邪^ノ
 術^ノの^レ行^キ所^ノの^レ惡^ノ俗^ノ想^ノ像^ヲと^レく^レ只^レ是^レ作^ル者^ノの^レ寓^ノ
 言^ノの^レも^レ也^{ナリ}。この一条國字評薩頭陀壓勝咒方云云の条下よ追書せよ。

鬼臉見

金瓶梅^ノ隔^テ牆^ヲ掠^ル鬼^ノ臉^ヲ見^ル可^シ不^レ把^テ我^ヲ說^キ殺^スと^レ云^フ
 十^ノ語^ヲを^レ張^ル竹^ノ坡^ノが^レ拔^キ草^ヲと^レく^レ趣^ク談^クの^レ部^ノ卷^ノ子^ノあり^ニ
 鬼^ノ臉^ノ見^ルハ^レ上^ニ評^ヤと^レく^レ無^ク同^クと^レく^レを^レ好^ムベ^キカ^コウ^ト同^ク
 夏^ノみ^く小^ノ兒^ヲと^レ權^ヲを^レ面^ヲを^レ見^ルと^レく^レ金^ノ瓶^ノ梅^ノ子^ノ所^ニ云^フ
 隔^テ牆^ヲ云^フハ^レ鬼^ノ臉^ノ見^ルハ^レと^レく^レが^レの^レた^レと^レく^レ牆^ヲを^レ
 隔^テて^レけ^レる^ノを^レと^レく^レ權^ヲと^レく^レは^レと^レく^レハ^レ見^ルを^レ故^ニ可^シ不^レ
 把^テ我^ヲ說^キ殺^スと^レく^レ說^ハ戲^ノ謔^ノの^レ謔^ヲ異^ク之^レ說^ハ驚^クと^レく^レ
 驚^クが^レ徵^ノ心^ヲと^レく^レ便^シ是^レ譬^ノ言^ヲ喻^ヲと^レく^レの^レた^レと^レく^レの^レた^レと^レく^レ

掠^ハトリ^クル^レト^レ云^フ
 髪^ヲテ^テツ^ケツ^ク
 ロ^フユ^トヲ^テ水^ヲ詩^ヲ
 傳^ニ掠^ニ掠^ニ雲^ニ
 髻^トアル^ト掠^ト
 同^ニカ^スル^ト訓^ニ
 テ^ハ義^タカ^フ也^{ナリ}

之届くめがきろくくわらぬぞとらするん先ッ鬼臉見のべカエウ
らりやとらく解さるんがさうねらるんかぶん一さきふりよりさきも
杜興が面貌のせろくけろくけんといひ一愚評の証を
知るべし

ふの它るは追々評まじりゆりゆりあれども筆硯の
けろくまをらるんかぶるん盡しむれもあふ又さるし
つんとらよめ

辛卯夏六月八日追記

此書吾自筆の原本ハ最小伊勢松坂なる友人小津桂窓小をこし贈り
遣しぬ其代と桂子今年備書子課せとておと字をせとらけら者是
也其の筆工支月也四小字志まの魯魚亥帝の誤字を奉小皇お
を命まとも今ハ老眼不明ゆと校訂小由なるゆの故ハ強て愚拙ハ淡
き其遠くを正まとのら尚少漏と及ぼるもまらつてハ具眼の者見
ることあらハ又直し是を訂正まへ

天保十四年癸卯十二月廿五日 七十七好著此堂重識

